狂言

昭和40年1月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社　安井印刷所　電㊟4881

狂言人語

共同社

一九六五年の新春を迎えて皆様の変らぬ御支援を先ず心から御礼申上げます、さゝやかなパンフレットですが皆様の御厚志を受けて第七十六号、八年目のこの春を迎え同人一同喜びにたえません、今後共よろしく御支援の程を。扨巳年の正月はまず、例年の通り正月三日の初謡会と六日の学生能から始まります。今年も又数多くの名人上手が舞台の上で火花を散らして競演されます御期待下さい。

一月の演能

一月三日　午后二時
新年初謡会

一月六日　学生能と狂言の会　八、三〇
能　田村　戸塚雅子　鬼頭秀昭　西村　欽也
能　三山　水藤典子　田中秀代　高安　滋郎
狂　口真似　平松　昌彦　岡崎　信之　早川　強
狂　棒縛り　寺尾　忠正　伊奈　俊美　舟橋　允就

一月十日　春星会　正午始
能　屋島　金剛　巌　西村　欽也
間　佐藤　秀雄
能　羽衣　片岡道子　豊嶋十郎
能　殺生石　豊嶋弥左ヱ門　高安滋郎
間　佐藤卯三郎

一月十四日　西陵高校鑑賞会
狂　狐塚　井上松次郎　井上礼之助　佐藤　秀雄
狂　松楪　井上　祐一　佐藤　友彦　井上松次郎

一月十五日　清韻会
能　忠度　赤間　鎮雄　西村　欽也
間　井上礼之助
能　安達原　稲生　芳雄　高安　滋郎
間　佐藤　秀雄
狂　竹生嶋参り　井上　祐一　佐藤　友彦

一月十七日　梅猶会
能　田村　梅若　修一　西村　欽也
間　山本光次郎
能　景清　梅若　猶義　西村　弘敬
能　道成寺　梅若　盛義　高安　滋郎
間　野村又三郎　井上礼之助
狂　二人大名　野村又三郎　佐藤卯三郎　井上松次郎

一月二十四日　宝生会
能　八嶋　辰巳　孝
間　佐藤　秀雄
能　葛城　宝生　九郎
狂　岡太夫　井上礼之助
間　佐藤卯三郎　井上松次郎
河村　丘造　佐藤　秀雄

賀春

昭和四十年元旦

狂言　共同社

狂言解説

口真似＝何事につけても差出る太郎冠者、主から某の云うようするようにせいと云はれて、自分の叱られる通りを客にする。

棒縛り＝留守中に酒を盗んで飲む太郎冠者を棒縛りにし次郎冠者を後手に縛つて外出した主、戻つてみるとこわいかに、両人共酒盛りをしているとは両手を使わずに舞う小舞の面白さを如何に表現するかがみものです。

松楪＝お正月に貢物を捧げる祝言物百姓と奏者の応待に昔のおゝらかな風物を感じます。今回は古風なオーソドックスな演出で、ゆったりした初春情緒をお味はい下さい。

狐塚＝狐塚の田に鳥を追いに出された憶病者の太郎冠者、見舞に来た次郎冠者や主を狐の化けたのと思い込んでくゝり上げる。松葉でいぶした後皮をはごうと鎌を取りに入つた後で縄を外した二人は……。

竹生嶋参り＝竹生島へ抜け参りをした大郎冠者恐つた主の機嫌を直そうと秀句を云い出すが、犬、猿、蛙、辰まではよかつたが蛇（くちなわ）でホーどつまつてしまう。

二人大名＝京へ上る大名、下男の代りに往来の者を使うが、ドツコイ太刀を持たれた為に、鶏のけ合いから、おき上り小法師の真似までさせられる。

岡太夫＝聟入に舅の所でわらび餅をふるまわれた聟、家の嫁がろうえいにあるものと云へばこしらえると聞いて尋ねるが、中々わらび餅が出ないので腹を立てる……。

誓願寺と和泉式部

西村　弘敬

昨冬淡交会の主催にて橋岡氏の追善能が催された節に、珍らしくも誓願寺の能が上演せられた、其の曲の中に和泉式部の名が出て来るが、此の誓願寺と和泉式部とは、どういふ関係があつたのか、謡の本文を読んだだけでは一向に判らないし、又外に此の事に関して解説せられたものも見当らないが、私の所持する「語り」（かたり）の書物（之れは能の時に小言として演ずる脇の語り）の中に誓願寺の語りといふのがあつて、之れによれば誓願寺と和泉式部との関係が始めて判るので、一部分抜萃して御目にかける。

『抑此誓願寺と申は、天智天皇の御建立。御本尊は春日の明神と加茂の明神と。みそぎを分けて作り給ひし如来像にておはします。又和泉式部と申は。因幡の国大江雅致の娘たりしが、和歌の才世に勝れて聞へしかば。帝都に召し登せられ。上東門院に仕へ奉り。弁の内侍と申ししが。和泉の守道貞の妻と成りて後は。和泉の国に居ましければ。和泉式部と申せしなり。――中略――又式部は菩提の道に志深かりければ。性空上人を頼み参らんとて。播磨の国書写山へと志ざし給ふ。此の上人

は法花書写の行を勤め給いて。六根浄に叶ひしかば。式部の登山をいとい給い。女人結界の地をけがされては如何あらんと。先き立つて山下に下り給いて対面あり。此の時式部の歌に「くらきより、くらき道にぞ入りぬべき。はるかに照らせ。山の端の月」其の時上人法花唯一乗の法文。「無二亦無三」の偈を説き給いければ。其時又式部。「ふたつなく。みつなき法と聞くからに。五つのさわりあらじとぞ思ふ」と和歌を以て答へられければ。上人奇特の女性かなと感ぜられ。猶後の世を思し召さば。誓願寺の御本尊を頼み給ひ。一心に祈念し給はば。成仏疑ひ有るべからずと。くわしく仰せ有りしかば。則ち此寺に帰依あつて。念仏怠りなく。臨終正念にして。往生の素懐を遂げられける。さあるによつて。なきがらを此寺に納められける。』以上で和泉式部が此の誓願寺に帰依せられ、庵を結んで此の所にて没せられたるによつて、此の寺に墓所がある事が合点出来る次第である。

狂言弁当

野村広二

新年おめでとうございます。まづ、はじめに昭和四〇年の能楽界が多幸であるよう、みなさまと祈りたいとおもいます。

さて、新しい年を迎えるに当つて、過ぎた一年の回顧を、例年のように、してみましよう。三九年は、オリンピックの芸術展示に、能、狂言が参加、その上演が広く注目をあびました。開会式が能、狂言と相通うことはさきにお話しましたが、黛敏郎氏作曲の鐘の音をまじえた電子音楽も、芸能を愛する日本人の心を深く打つたと同時に、世界の人々の胸に、永遠の時の長さを知らせてゆかしくもひびいたことでしよう。常陸宮ご結婚祝賀能「天地（あめつち）のうた」をテレビ（NHK）でみましたほか、能芸史に残る、耳目をそばだてた演能記録も数々ありました。能、狂言の渡米も大きな話題でした。

しかし山本東次郎氏の他界、島沢啓次氏の逝去は寂しく、それとかわり、幸祥光氏の芸術院入りは吉報でした。名古屋では、夏の大衆能が戦後はじめてといいたい充実振りをみせたことが特筆に価するといえましよう。このときの狂言「蚊相撲」（松次郎、祐一、秀雄）は、「巻絹」（佐藤太俊、太田重次郎）「小督」（大塚一二）「舟弁慶」（内藤泰二）とともに印象にのこりました。これと、能では「邯鄲」（片岡道子）。狂言では、「仁王」「樋の酒」「若菜」「二千石」「小傘」「地蔵舞」「粟田口」などがあげられます。それ以上、井上礼之助の「釣狐」が話題です。今年は大蔵流（キツネ茂山千五郎、白蔵主善竹弥五郎）と二回の上演でしたが、和泉と大蔵の比較はしばらくおくとして、戦後名古屋和泉流が演じた三人の演者では、井上松次郎があくまでキツネのおびえと陰さんに徹した狂言的写実の仕方、井上礼之助がわざよりも心持で演じたやり方、佐藤秀雄がその中間をいった動きと、三者三様であるのは興味深く、しかも、深浅の差こそあれ、名古屋の味—おだやかなよさが出ていました。

なお右にあげたいくつかの狂言が組まれた朝日狂言会、名古屋和泉会（井上家追善の会）、やるまい会、中日狂言会が、どの会も熱心な愛好者を集めて、高度な見物のふんい気を、昨年もつくつていたことは申すまでもありません。なかでも「唐相撲」（茂山千五郎ほか）は人気を呼び、片や千五郎の「御田」善竹弥五郎翁の「楽阿弥」の小舞二番は実によかつたとおもいます。野村万蔵の「朝比奈」、万蔵と三宅藤九郎の「弓矢太郎」もみばえがしました。ただ中日狂言会の狂言の筋がどこかで重り合う番組立は余り感心しません。能では、二〇番に余り好演を記録しましたが、とりわけ、金剛巌の花、観世元正、元昭兄弟が格調をととのえだしたこと、本田秀男の「鵜飼」前半の絶妙のよさは、六郎の「卒都婆小町」、猶義の独演三番能の一つ「安達ケ原」（前半）とともに、忘れることができません。伊勢神宮では、金春信高の「三輪」が奉納され、北陸では佐野安彦氏に金沢市民文化賞がおくられたことを添えたいとおもいます。狂言や能の放送のことは割愛しますが、一つだけ、カラーテレビではじめて「綾鼓」（近藤乾三）「邯鄲」（後藤得三）をみたことと、新作品で、狂言「くさびら」や「猿楽の手法による叙事詩—神々の結婚」、長唄「能面」のあつたこと（いづれもNHK）を記したい。名古屋で能面展が二回（仙田雪山子、花房英樹）、日本服飾美展、院展（新井勝利氏の伊勢物語）も見逃せない行事でした。「世阿弥」関係の文献も、三八年につづいて、新世面のはなばなしさがみられ、外国人の研究も新分野に入つてきた様子です。本では、年末までに数冊でましたが、そのなかの谷川徹三先生の「芸術の運命」「人・文化・宗教」「哲学と文学への三つの案内」の三冊を披露しておきます。

三九年も、いい狂言、能はもちろんありましたが、他方、みてくれや、ざとい演技や、味のないむなしいカタの連続におわつたものもみうけました。狂言や能の道は実に遠いとおもいます。私事ですが、この頃は、三番目物よりも、脇能や老女物がみたくてたまりません。どうしてか、もう少しつきつめてみたいとおもいます。今年は、名古屋の方々には、新しい目で、この世界をみていただきたいと念願して止ません。熱田能楽殿ができて十周年。今年もいい狂言や能をうんとみせていただきたい。

岡太夫について

日本古典文学大系月報十二月号に古川久先生が和漢朗詠集の招介の中で左の通り書いておられます。

「前文略……

しかし和漢朗詠集の面白さは後代文芸への影響面に最も強く感ぜられる。とくに謡曲に及ぼしたところは大きいが割に知られていない分に、狂言の「岡太夫」がある。この曲は各流とも古くから本文を残していながら、現在絶えて上演を見ないもので、それは朗詠を中心としたおかし味が縁遠くなつてしまつた為であろう。筋は舅のもとを初めて訪れた蕨餅の馳走になつた聟が、朗詠の詩にものつていると教えられて帰り、妻に所望して思い出そうとする話である。

中で妻は、

池凍東頭風渡解（池の凍りの東頭は風渡つて解く）窓梅北面雪封寒（窓の梅の北面は雪封じて寒むし）から梅干を、気霽風梳新柳髪（気はれて風新柳の髪をけずる）氷消浪洗旧苔鬚（氷消えて波は旧苔の鬚を洗う）から野老（ところ）をというように誘い出すが

夫はなかなか見当らないのに腹を立て、妻を打ちやくする、妻は紫塵頻蕨人拳手（紫ぢんの若き蕨は人手をにぎる）とはこのことかと嘆くので、やつとわらび餅が解かるという結末になるのである。これはいかにも素朴な構成として狂言の古体を偲ばせる曲であるが堅苦しい詩句と食物の配合が、矛盾した意外なおかし味をよく発揮している。

……以下省略

岡太夫と言う狂言が誠に古態をそのまゝうけていることは上演回数が最近少ない事、つまり現代では余り適格にその面白さがうけとられないと云うことからではあるまいか。

随想

ありがたや

西村弘敬

ひところ流行歌手が、「ありがたやありがたや」といふ様な歌を、盛んに歌つた事があつて、世の年若い連中が、無性に真似して歌ひまくつた事もあつた。又この「ありがたや」とは、ある宗教にこり固まつて、無暗に何でもかでも「ありがたい」「ありがたい」と盲信（もうしん）する連中を、側の人が「ありがた屋」などと、悪る口に使ふ事もある。然し本当の「ありがたや」とは、世の中の凡ての事物を、神仏の御恵みなりと感得して、日々を感謝の気持ちで送る事が出来れば結構な事ではあるまいか。

扨我々の日常謡つて居る謡曲の中にも、時々「ありがたや」といふ文句はよく出て来る、昨冬十一月二十三日に上演された誓願寺という曲は、極く久しぶりに出て来たが、此の曲の中には「ありがたや」という句が随分多くあるので、試に調べて見たらば、何んと一曲の中に十六遍出て来た、謡の中に全じ文句が何回か出て来るものも、随分外にも色々ある様で、源氏供養の謡には「はづかしや」が六遍出てくる。まだ色々ある様ですが又次の機会にゆづる。

鞠座頭の蹴鞠について

十一月三十日東京和泉会で鞠座頭が出て居りました。名古屋では昔は出たそうですが最近一度も出ておりませんので蹴鞠について一寸調べてみた所面白い話しがありましたので転載しました。けまりはしゆうきくとも呼ばれ大体今日のサツカーと同じように鞠を手で持たず足のみで扱うのが特色で、陽明天皇の御代に漢から渡来したと云はれる。

漢の成帝が始まりといわれるが、流行したのは唐になつてからで、李白の宮中行楽詞に天人弄綵毬の句があるのは玄宗の宮中に蹴鞠の会のあつたのを歌つたものだそうである。

平安末期に、難波宗長、飛鳥井雅経の二名があらはれ、徳川時代に入つては後者がおとろえ前者のみ盛大になつたと云う。

蹴鞠のグランドを「かゝり」というが七間半四方が正式であるが庶民用は三間四方位、その四隅に桜柳楓松を植えたが庶民は竹で間に合はせたらしい。

人員は八名であるが六名又は四名の場合もある。庶民は四人と決まつていたらしい。

鞠は鹿皮製、中空でよくはづむが形は繭形で中がくびれていた。水干、指貫袴深沓となつているが、庶民は足袋跣で着物の尻をからげる位であつたらしい。

四人の場合の遊技の方法は、四人が鞠場の四隅を守り正方形の鞠場を四等分した領域をそれ〳〵受持つ自分の領域に落ちて来る鞠を蹴返すのである。

一番選手を一の座又は軒といゝこれは師匠かキャプテンが勤める。

メンバーは二の座から四の座まであるまづ鞠を中央におき四の座が這つて行つて鞠を手でとり又這つて三歩程退くその時三の座が出て中央に接近し両者の距離が六尺位になつた時四の座が鞠を蹴つて三に渡すその蹴方は最初右足で上方に蹴上げ落ちて来たのを左足で蹴上げ、更に右足で今度は虹形に弾道をつけて三の座の方に蹴る。

三の座はこれを右足で受け上方に弾ませ左足で蹴返し最后に又右足で虹形にポンと蹴つて一の座に度す。このように三足使つて三段に蹴るのが常法で受け鞠、自分の鞠、渡す鞠の名称がある。

一の座は二の座に渡し二の座は三に三の座が四に四の座が再び一の座に戻す一の座が最後に高く〳〵上方に蹴上げこれを揚げ鞠という。

この後には順序不同で各自に高く蹴るのだが自分の領域に落ちて來るのは責任をもつて蹴上げねばならぬ。

以上が大体蹴鞠の要領であるが之を狂言鞠座頭の演出と考え合はすると之に大体合はせてあると云える。

（以上の蹴鞠の要領は三十九年十二月号国文学解釈と鑑賞誌上から抜粋したものである。）

賀正

ちごや

河文

電話代表㉓一三八一番

トヨダビル店

大名古屋ビル店

くすな

船津屋

電話桑名代表一八八〇番

二月の予告

二月二十一日　観世会　十一時

能　小袖曽我　片山慶太郎　片山博太郎　間　井上祐一

能　楊貴妃　観世元正　西村弘敬　間　佐藤秀雄

能　舟弁慶　観世喜之　高安滋郎　間　井上礼之助

狂　松拍子　井上松次郎　佐藤卯三郎　河村丘造

天正本より ゆつり葉を描出して みました

「一人ゆつり葉もち出る又一人松をもちて出る都につきておさむる。そう者出合、両国の者一度参事目出たきとて歌よまする。

〳〵今年よりくわんにくらいをゆつりえて殿も常わかぢげもとこわか」

〳〵君が代の久しかるへきためしにやかねてそうへし住吉の松」うたほめる酒のませる、そうしや舞てさす。

ふし「やら〳〵目出や〳〵な、ふへ舞やら〳〵めてたや〳〵な殿も常わかちけもとこわか、たゝ此御代こそ目出けれひやうしとめ」

松ゆづり葉の古態はこれだけでは十分判明しませんが、山脇の型付本には今回上演の型と替の型として、烏帽子一つを二人でつけて相舞する型があるが之は後世造られたものではないかと思はれる。

百性狂言としては餅酒と同巧異曲でありますが室町時代の貢物納めの様子が知れて仲々上品な曲であります。

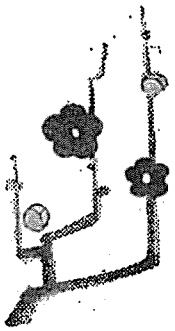
楽師会より御知らせ

近藤三蔵氏　囃子披　竹内社中
都築誓氏　囃子披　竹内社中
近藤努氏　能舟弁慶披　殿島社中
水野雍氏　能二人静披　殿島社中
渡辺節子氏　能二人静披　殿島社中
殿島満里子氏　囃子披　殿島社中
殿島博子氏　囃子披　殿島社中

後記

先づ明けましてお目出度う御座います昨年十一月二十二日亀岡市出口京太郎氏（大本能楽会所属）からお便りを頂き「一昨年笛と太鼓で能楽の囃子を演奏旅行して世界十四ケ国五十七都市を廻つた

アマチュア能楽ファンの旅日記」を「アサヒアドベンチュアシリーズ」として新春発売される由申越されました。とりあえず斯待して発売を待ちませう。



謹賀新年

一謡会　河村鉦二
石井会　西尾孫太郎
藤門会　加藤良久
長生会　鬼頭八郎
中部金春会　前田昌広
竜吟会　藤田六郎兵衛
観衛会
霞会　田鍋惣太郎
潤水会　林甲子男
観水会　野崎太郎
観正会　久田秀雄
春星会　片岡道子
高安会　高安滋郎
たなびき会　田鍋惣一郎
調友会
名古屋能楽鑑賞会　田鍋惣太郎

名古屋巽会　内藤泰二
名古屋能楽倶楽部　植村真太郎
風韻会　殿島修二
幸友会　福井啓次郎
金剛流松風社　片野東四郎
掬水会　柴田初太郎
曲水会　増田一雄
金竜会　金森準三
春鶯会　山田仁三郎
正楽会　加藤丈太郎
松謡会　佐藤太俊
清風社　大塚一二
掬水青陽会

能楽協会　名古屋支部　支部長　田鍋惣太郎
名古屋　和泉会　会長　徳川義親
狂言　共同社

（イロハ順）

狂言

昭和40年3月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社　安井印刷所　電㊟4881

狂言人語

共同社

「梅一輪一輪づつの暖かさ」

寒梅もほころびてというものの、節分すぎての連日の寒さは、せつかくほころびかけた梅も又ちぢまるばかりの今日この頃ですが、皆様御健勝と存じ上げます。

二月は観世会の御会の他は目立つた催もありません。いささか淋しい月になりましたが、三月は名匠鑑賞能を初めとして中日五流能と華麗な催しが控えております。水温む三月芸術の鑑賞にのびのびおすごし下さい。

今年は狂言の催も朝日狂言会を初めとして種々企画しております。狂言教室としての小舞の稽古も追々発展の一途をたどつておりますが、何卒皆様の御支援を切にお祈り致します。

去る二月三日NHKのCKホールで大蔵流家元大蔵弥太郎氏によるNHK狂言研究会の小舞発表会がありました。善竹幸四郎氏全圭五郎氏の応援出演を得て小舞十数番を披露されまして、真面目に熱心に出演される方々をみて斯道のため喜びにたえぬものを感じました。

和泉流宗家和泉氏も毎月小舞指導に来名されており、私共としても狂言芸事の流布、普及のため慶賀にたえぬものがあります。同好の士を心から歓迎いたします。

二月の催能

二月二十一日　観世会

能　小袖曽我　片山慶太郎　片山博太郎
　　問　井上　祐一
能　楊貴妃　観世　元正　西村　弘敬
　　問　佐藤　秀雄
能　舟弁慶　観世　喜之　高安　滋郎
　　問　井上礼之助
狂　松囃子　井上松次郎　佐藤卯三郎　河村丘造

狂言解説

松囃子＝毎年お正月に祝儀を舞いにやつてくる万才太郎が今年は未だ来ない。そこで兄弟そろつて待つていると遅れてやつて来た太郎、祝儀の舞が例年のように目出たくないようである。それもそのはず、かんじんなものを二人とも忘れていた……。

当時ののどかな正月をしのばせるおめでたい狂言です。

狂言空見

野村広二

今年は巳年。G氏からおくられた「円空」のカレンダーは得がたいひと品。日付の台紙の紅色が「道成寺」の赤頭を暗示していて味なことだと思つた。さて一月十二日の歌会始で、京都府小林信子さんの入選歌「盲生ら山の小鳥を聞きわけて名を言い競い登りゆくなり」が披露されたとき、狂言の「月見座頭」「清水座頭」の主人公の心境が想像され、感がい深かつた。昨年末、大蔵弥太郎氏におあいしたときお題の「鳥」に話がふれたら、即座に「鶏聟」がございますと答えられた。狂言にも「千鳥」「梟山伏」など鳥に関係のあるなじみの曲は多いし、能は「鶴亀」がすぐみなさんの頭に浮ぶことでしよう。「歌会始」のとき（NHK）、終り方で、写し出された源氏絵のお屏風の一こま「けまり」の図は、能の「遊行柳」と結びついてまことにゆかしかつた。正月は、「翁」（宝生九郎、田中幾之助、大蔵弥太郎）「庵の梅」（三宅藤九郎）「末広」（善竹弥五郎）など（NHK）で楽しかつたが、名古屋では、巳年にちなむ「道成寺」を梅若盛義が見事に演じた。その折の鐘つりは、名古屋の四青年（祐一、良治、弘之、友彦）がりつぱに行ない、「松楪」「二人大名」もよくできて、共同社の今年の出発は、なかなか気力に富んでいた。期待の能二番「羽衣、バンシキ」（片岡道子）には匂いがなく、片や「石橋、連獅子」（紅、内藤泰二）は力演で、相反した結果をみた。本では、昨年末の「能―神と乞食の芸術」（戸井田良三）「芸のこと、美術のこと」（小宮豊隆）に「神仏混淆」学鐙一月号、白洲正子）がある。この続きが少し残つたが、次号にゆずらせていただき、二月の演能に期待したい。

天正狂言本と「竹生嶋参」について

近頃、わんや書店から古川久氏編による「狂言古本二種」が出版され、狂言文献中最も古い面目を伝える天正狂言本が収められている。これをめくつて見ていてふと気付いた点について述べて見たい。

本書の冒頭に「竹生嶋まふて」という題の狂言が載つている。天正本に収められている曲数は本文だけで百四番であり、現存するもの、或いは以降の諸本に見当らぬものが多くあるが、この「竹生嶋まふて」と同様の題名で今日現行している狂言に「竹生嶋参」がある。所がその内容は全く異つているのである。

天正本の「竹生嶋まふて」は「一人出てへつさひ天に参又一人出て竹生嶋へ参又一人出てへむさひ天へ参道にて行合、程なく参て連歌する……」となつており「やら〳〵めてたや〳〵やな」と舞い謡つてとめている様子でど

うやら百姓狂言、祝狂言的な色彩が濃くなつている。所が現行の「竹生嶋参」では大蔵、和泉とも次のょうに展開される。主に黙つて竹生嶋参りをした太郎冠者が主の怒りにあい、その機嫌を直そうとして他人の話を覚えていて話すのだが、くちなわの秀句につまつてしまい、苦しまぎれに「石蔵の中へぬら〳〵です」とわけもない返答をして主の叱りどめとなる。

あまりにも異つている両者の間に何らかに関連が果してあるだろうか？

天正本の成立は本文末尾にもある様に天正六年（一五七八年）であるが、和泉流最古の書である天理本は、成立年代は明らかではないが寛永十年（一六三三年）頃と推定されている。今この天理本の目録をながめてみるに「竹生嶋まふて」の題は見当らない。所がここに「ぬら〳〵」という曲名を見出すことができるのである。そしてその後、元禄元年頃写されたと思われる山脇家古本（和泉古本）の目録にもやはり、「竹生嶋まふて」は見当らず「奴良々々」という曲名が見られる。さらに時代を経て天明六年（一七八六年）頃書写の和泉流波形本になると「ぬら〳〵」（奴良々々）は消え「竹生嶋参」として登場して来るのである。残念ながら天理本、和泉古本の「ぬら〳〵」「奴良々々」という狂言の内容を知る機会を未だ持たないが、恐らく周囲の状況から見て、太郎冠者の「石蔵の中へぬら〳〵です」という言葉からその狂言の題名が生れ、狂言がその変遷の流れの中で洗練され固定化して行つたのだが、その時この一見卑俗的な響きを持つた「ぬら〳〵」も波形本の時代に至るまでに「竹生嶋参」と改題されたものと見て差し仕えないのではあるまいか。

つまり、天正本に現われた「竹生嶋まふて」と現行の竹生嶋参との間には何の関連もないのであろう。他にも天正本以後の狂言諸本には全く見出されないものが多くある。激しい流動期から固定期に至る狂言の性格を表わすものとして貴重な書である。

なお、天性本においても現行の「竹生嶋参」の様に太郎冠者が抜け参りをして主に叱られると云つた狂言の型は現れている。「西の宮参」というのであるが「大明（大名）出て人をよひ出しふほうこうとゆふておどす西の宮へ参ておもしろき事を見たとゆふかたらする……」そこでふしをつけた語りがあつて最後は「いろ〳〵のひやうしとめ」となつている。これは以後の諸本には見当らない。同様の型式をもつた狂言に、現行の「二千石」――と同じく天正本にも「地せん石」として見えているが、これはどうやら現行のものと大差はないようである。

三月の予告

三月七日　九皐会

能　鞍馬天狗　植村真太郎　高安　滋郎
　　井上松次郎
　　佐藤卯三郎

三月十四日　青陽会　正午始

能　嵐山　竹内　六郎　高安　滋郎
　　井上松次郎
　　加藤丈太郎
能　巴　西村　弘敬
　　佐藤卯三郎
能　巻絹　柴田　收武　西村　欽也
　　佐藤　秀雄
狂　歌争　佐藤　友彦
　　大野　弘之

三月二十一日　名匠鑑賞能　午后一時始

能　箙　辰巳　孝　西村　欽也
　　野口　禄久
　　井上　祐一
能　西行桜　宝生　九郎　西村　広敬
　　佐藤卯三郎
能　殺生石　宝生　英雄　高安　滋郎
　　井上礼之助
狂　墨塗　野村又三郎

三月二十八日　中日五流能

第一部

能　絵馬　金剛　巌　森　茂好
　　茂山　倖一　木村　正雄
　　佐々木千吉
能　千手　観世　元正　宝生　弥一
能　邯鄲　後藤　得三　高安　滋郎
　　野村又三郎
狂　悪女　茂山千之丘　茂山　倖一
　　木村　正雄
　　佐々木千吉

第二部

能　忠度　金春　信高　森　茂好
　　佐藤卯三郎
　　近藤　乾三
能　杜若　梅若　六郎　西村　弘敬
　　三宅藤九郎　宝生　弥一
能　安宅　三宅　右近
狂　水汲　三宅藤九郎　和泉　保之

協会名古屋支部よりのお知らせ

支部役員任期満了に付一月三日総会の節改選の結果全役員留任と決定即ち

支部長　田鍋惣太郎
副支部長　高安　滋郎　柴田初太郎
常議員　田鍋惣一郎　西尾孫太郎
　　前田　昌弘　内藤　泰二
　　六車　真三　真柄　米次
　　鬼頭　八郎　井上松次郎
　　鬼頭　五郎　増田　一雄
　　大塚　一二
監事　藤田六郎兵衛
相談役　西村　弘敬

尚左の方々が協会へ入会致されましたので御披露申上げます。

宝生　稲川寿一　鬼頭嘉男
　　竹腰勝一
小鼓　田鍋洋一
狂言　井上祐一　佐藤友彦

編集後記

二月二日　日本福祉大学、社会福祉センターとして図書館、慈昭館が新築落成式を挙行し三階ホール舞台披きに祝言（いわいごと）として寄付者小川宗一氏夫人日出子さんの仕舞「羽衣」と和泉宗家保之氏他の「夷大黒」一番が上演されたが来場の多数名士の賞讃を浴びた。

昭和40年3月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社　安井印刷所　電㊟4881

狂言人語

共同社

二月堂のお水取りが又来ました。三寒四温一日々々と暖かくなります。三月は待望の名匠鑑賞能と恒例の中日五流能が催されます。最高の配役と最高の演出をそろえて競演される此舞台に心から拍手を送りたいと存じます。平凡社の日本の美術から小袖と能衣裳が出ました。すばらしい色彩と柄行はたしかに一見の価値があると存じます。おすすめしましよう。

三月の催能

三月七日　九皐会　十時
藤　鞍馬天狗　植村真太郎　高安　滋郎
間　井上松次郎　佐藤卯三郎
三月十四日　青陽会　正午始
能　嵐山　竹内　六郎　高安　滋郎
間　井上松次郎
能　巴　加藤丈太郎　西村　弘敬
間　佐藤卯三郎
能　巻絹　柴田　收武　西村　欽也
間　佐藤　秀雄
狂歌争　佐藤　友彦
大野　弘之
三月二十一日　名匠鑑賞能　午后一時始
能　服　辰巳　孝　井口　禄久　西村　欽也
間　井上　祐一
能　西行桜　宝生　九郎　西村　弘敬
間　佐藤卯三郎
流　殺生石　宝生　英雄　高安　滋郎
間　井上礼之助
狂　墨塗　野村又三郎
井上松次郎
佐藤　秀雄
三月二十八日　中日五流能

狂言解説

歌争＝のどかな春の日に野遊びにさそいにやつてきた男、王仁の歌、慈鎮和尚の歌　とんでもない引歌に使つた挙句、おきまりの相撲となり負かされてしまいます。言葉のやりとりのおかしさから急な動きへと進展する狂言の一つの典型といえましよう。

墨塗＝本国へ帰る大名が馴染の女の許へ暇乞いに行く。女は涙を流して別離を悲しむが涙とみたのは女が秘かに用意した水で、それを見つけた太郎冠者は一計を案じて墨を入れた水入れとすりかえる。何も知らない女は……考えるだけでも笑えてくる狂言です。

狂言空見

野村広二

二月は珍しく雪の日もあつたが、また久方ぶりにうぐいすが、朝庭へ散歩にきてはないてくれた。たまたま暖い日を得て、飛騨路に、F空さんと下呂町の御田植祭を探訪する。祭は、岐阜県の無形文化財で、森の八幡さまの行事。梅のつぼみが、あたたかい日射しにふくらみ、京都の北山松をおもわせる山を背景に、日中の「田遊び」と道行と花笠踊をみる。「御田」の小舞、伎楽のシシ、早乙女の紅と白の装束が狂言の前身を暗示するよいおまつりだつた。昔はもつと儀式ばつていてしかも、たのしかつたにちがいない。二月の狂言は「松囃」（観世会・松・卯・秀）。小品ながら万才太郎が年どり米のさいそくを暗にするあたりは、「布施無経」同様、むつかしい。なお十九世紀のフランス画家、モロー展でみた西洋の神秘が、そのとき元正の演じた「楊貴妃」の東洋の神秘と一脈通じあつて、大層興味ぶかかつた。わたくしだけの感慨だつたろうか。その前後、カゼで、能楽協会の式能も、産経能も、招待をうけながら、行けなかつた。先輩、同好者のたよりが待遠しい。また二月は「日本能楽会」が再発足のはず。（田鍋惣太郎氏十名の発起人に加わる）。本では、浅井宋観氏から、近影にそえて、金婚記念本の自著「能面と能具の絵画」がおくられた。「芸術生活」には　一月号から、日本民俗芸の紹介が、本田安次氏執筆でのる。東海北陸の諸行事ももちろん頁をさかれている。ほかの三冊のことは来月に。三月も充実した能組がそろう。期待したい。

和泉流狂言の発生と伝統　その一

和泉流狂言は一般に名古屋が発生の地といわれており、事実そうなのであるが、ここで一度もう少しくわしく触れて見よう。

名古屋市史の「風俗篇」によると、江州坂本に佐々木岳楽軒という隠士が居りこれが伝えた狂言が後に和泉流として流派を形成していつたことが記されている。即ち彼は神道歌道を修め殊に狂言をよくして、その甥佐々木源五郎に伝えた。源五郎（元幸）は京都に住み、諸国に名を得た上手であつたが、後に坂本にかえり一葉軒と称した。この弟子に甥の鳥飼五郎左衛門元純と日吉満五郎超運とがあつた。満五郎超運はその奥儀を極め、甥の宇治源衛門光映、及び早世した鳥飼五郎左衛門の遺子鳥飼和泉元光に伝えた。和泉は後に伯父の山脇姓を名乗り、実子源助に伝えた。そしてこの山脇源助が京都にあつて多くの門人を養い流派としての形をなしとげ、後に尾州藩に抱えられることになつたのである。一般に和泉流はこの源助をもつて初代宗家としているようである。

名古屋鍋屋町の教順寺にあつた七代宗家山脇元業の建てたと思われる「狂言大夫山脇和泉家流伝統之碑」にもこれと同じようなことが記されている。

所でこれを他の流派の伝統と考え合せてみるとき、狂言の流動期から固定期へ、流派の形成の上でいろ〳〵なことがわかつてくる。大蔵流がもつとも古い家柄であることは広くみとめられ

ているが、大蔵家の系図によると流祖に玄恵法師をおき江州坂本居住の日吉姓数代の後、金春禅竹の子四郎次郎が養子となり、大和に居住する。次がまた養子で大蔵姓を名乗り宇治弥太郎とも称した人であり、次に弥右衛門一代を経て虎政、虎清、虎明と続いている。

所で太鼓の似我与左衛門国広の「四座役者目録」には

観世方狂言之次第に

日吉満五郎　吉野とちはら大夫座の者也尊若養子也。

宇治源右衛門　日吉満五郎　甥也。

今春方狂言之次第に

大蔵弥右衛門　日吉満五郎弟子也。今の大蔵弥右衛門先祖也。

という記事が見えている。この場合の弥右衛門は四郎次郎の次に並べて書かれているので、宇治弥太郎と同一人かとも考えられる。そして観世方の次第を見ると源右衛門がやはり満五郎の弟子で、これは和泉流のところで述べたのと一致するが、この源右衛門は「わらんべ草」によると、宇治源右衛門として鷺流の源流とされているのである。先の鳥飼和泉が日吉満五郎に芸を教えられたのであるから、三流の系図をたどつてゆくと、奇しくもこの日吉満五郎の所で三つの系図は一つになつて来るのである。和泉流の佐々木岳楽軒、一葉軒が坂本に居たのも、大蔵流の四郎次郎以前には代々、日吉姓を名乗つて坂本に住んだのも偶然の一致ではなく、流派が分立して行く以前のことなのであると思われる。　T・S生

能楽に於けるわきの意義

昭和四年三月発民俗芸術紙上に折口信夫氏が標題の下に

「田楽におけるもどきについて、もどきは普通からかい役だけのように感じられているが、もどく（動詞化したもどき）の用語例からみても反対する逆に出る非難するなどの意味をもつが、古くはもつと広い意味があり演芸史の上からは物まねする、説明する、代つて再演するなどの意があり、猿楽におけるおかしは之から変転しているとみられる。をかしはおかしがらせることだと一般の解訳であるが実は他人の領分まで侵入するからの犯しでもある。猿楽におけるこの役名にはもどきと同様説明の義もあつたらしい。これに狂言の字を当てたは其言立、語りにをかし味があつたからで、いづれも猿楽能のわき芸だつたので此の脇方からの分立がやがて能と狂言に岐れていつたと思われる。

一体能楽ほど多くのわきを持つているものは少ない。あい能力がそれであり、狂言の方にアド（して役をおもと云ふに対して脇役を云ふ）がある。猿楽は即ちもともと脇芸だつた。能楽と改称しても本領だつた脇芸の約束が守られ、いくつものわき芸を重ねていくようになつた。

日本古代の神事演芸は神と精霊との対立にその単位があつた。シテ対ワキはそれから出来たので、能楽の本領は其のワキ方にある。そのワキが醇化するとワキ方からシテ方を生み出す。ワキ芸そのものの中からシテ方を生ずる。

幸吉などではシテが一人ではない。またこれが分化して自由になるとオカシ、狂言としておどけ役を消化する事となる更に狂言の方にアドというものが生まれ来た。アドは大鏡にもあどうつめりしなどとあるように、相の手を打つこと相手方となり動作を示すもので、やはり説明役の一種である。このアドと同じ意味から出たものに能の間がある。

間と云うのは前しでと後しての間のつなぎをするからの名称と考える人があるがそれは誤である。即ち日本の芸能の特徴であるもどきの手、即ち説明と考えるべきである云々とあるこうしてみるとわきと狂言の起源については一層研究すべきものがあるのではないか。（HS生）

四月の予告

四月四日　淳諷会

能　玉葛　太田重次郎

間　井上松次郎

四月十一日　久田観正会　十一時

能　養老　上田照也　高安滋郎

能　草子洗小町　観世元正　西村弘敬

間　佐藤秀雄

能　道成寺　久田秀雄　西村欽也

間　井上松次郎　井上礼之助

狂　昆布売　佐藤卯三郎　河村丘造

四月十八日　観世会

能　巴　大槻秀夫

間　佐藤友彦

能　西行桜　観世鉄之丞

間　佐藤秀雄

能　安達原　梅若万三郎

間　井上礼之助

狂　吃り　佐藤卯三郎　井上松次郎　河村丘造

四月二十五日　掬水会

四月二十九日　幸友会

第十回記念　中日五流能

昭和四十年三月二十八日（日）　名古屋テレビ塔前　愛知文化講堂

第一部（午前十時）

金剛　敏森　茂好

馬　谷口喜代三　金春惣右衛門　大倉長十郎　藤田六郎兵衛

絵　新作狂言　平岩弓枝作

悪　観世元昭　女　茂山千之丞　茂山千五郎

観世元正

手　宝生弥一

郢曲之舞　吉見嘉樹　大倉長右衛門　寺井政数

仕舞　玉之段　松風　辰巳龍馬孝　熊坂　桜間武　田太加志

後藤得三

邯鄲　高安滋郎　金春惣右衛門　安福春雄　鵜沢寿　藤田大五郎

傘之出

附祝言

第二部（午後三時三十分）

金春信高

忠度　瀬尾力武　田鍋惣太郎　森茂好　寺井政数

仕舞　山田仁三郎　友枝喜久夫

半蔀之段

鵜飼

近藤乾三

杜若　西村弘敬　吉見嘉樹　金春惣右衛門　藤田大五郎

沢辺之舞

鵜沢寿

狂言

水汲　三宅藤九郎　和泉保之

能　太鼓　柴田初太郎

仕舞

梅若六郎

安宅　宝生弥一

勧進帖　安福春雄　大倉長十郎　藤田六郎兵衛

延年之舞

貝立

附祝言

主催　中日新聞

県内ラジオ、テレビ、能楽師宅にて発売中

狂言

昭和40年4月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊥1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社　安井印刷所　電㊤4881

狂言人語

共同社同人

つくしが顔を出し　ゼンマイの芽が土を持ち上げる今日此頃　楼のつぼみもふくらみ日一日と春の気配は近づいております

恒例の朝日狂言会は今年は故東次郎翁を偲んで若き山本兄弟の期待される芸境を名古屋の舞台で親しく鑑賞して頂く予定で計画しました　大蔵流の「水掛聟」「茶壺」の二番に和泉流「腰祈」「名取川」「止動方角」を添えて配役中です。近日詳細発表の予定です

四月の催能

四月四日　淳風会
能　玉葛　太田重次郎
間　井上松次郎
四月十一日　久田観正会　十一時
能　養老　上田照也　高安滋郎
能　草子洗小町　観世元正　西村弘敬
間　佐藤秀雄
能　道成寺　久田秀雄　西村欽也
間　井上松次郎　井上礼之助
狂　昆布売　佐藤卯三郎　河村丘造
四月十八日　観世会　正午始
能　巴　大槻秀夫　西村欽也
間　佐藤友彦
能　西行桜　観世鉄之丞　西村弘敬
能　安達原　梅若万三郎　高安滋郎
間　井上礼之助
狂　吃り　佐藤卯三郎　井上松次郎　河村丘造
四月二十五日　掬水会
能　鉄輪　柴田収武　高安滋郎
間　井上松次郎
狂　寝音曲　大蔵弥太郎　善竹圭五郎

狂言解説

昆布売＝北野のお手水の夜に供を連れずに出掛けた大名、持った太刀を煩わしがり、通りがかりの昆布売に太刀でおどして持たせてしまう。所がたちまち主客は顛倒して……。

吃り＝開幕の急な動きにたちまち舞台は緊張する。そしてお定まりの夫婦喧嘩の仲裁になるが吃りの太郎は謡で女を散々にやっつけて逃げて入る。

寝音曲＝主人に謡をうたえと命ぜられた太郎冠者、酒を飲まなければとか、妻の膝枕でなければと条件をつけた。太郎冠者の演技の中での演技が見ものです。

「ぬら〳〵考」

古川　久

本誌第七十七号に近ごろ私の編んだ『狂言古本二種』（[illegible]ん や書店刊）につき、天正本の「竹生嶋まふて」を紹介した記事が揚げられた。執筆者の御氏名が記されていないので、直接申し上げることができないまま、誌上を借りて所感を述べてみたい。

天正本「竹生嶋まふて」と和泉流現行「竹生島参」との間に全く関連のないことや、「竹生島参」の古名が「ぬら〳〵」であったことは、右記事に指摘された通りである。その中で書名を挙げて内容未見として居られる天理本について比較すると、素朴な表記法を取ってはいるが、同書の「ぬら〳〵」は例えば『狂言三百番集』の「竹生島詣」と同じ内容のものと言っていい

さてこの「ぬら〳〵」改題の時期について波形本を挙げられたが、雲形本には確か「奴良々々竹生嶋参」となっている筈で、この辺におよそ見当をつけてみることができよう。その理由は卑俗的な響きを洗練させたものとされるのに従うより外、根拠を挙げることはできない。ただし「どぶかっちり」のような面白い曲名が残っているところからすると必しも洗練の結果だけとも定めかねるのであるが。——

ともかくこの改題に際し、天正本の「竹生嶋まふて」が、何の関係も持たなかったのは事実である。それは今見る何流のどの本にも、この曲は記録されて居らず、両者混同の恐れは全く無かった。「竹生嶋まふて」が何故亡びてしまったかは、何とも説明のたよりがなく、ただ祝言物の単調なのが飽きられたのでもあろうかと推察する外はあるまい。

以上和泉流についての事情は、大蔵流にも当てはまり、『古本能狂言集』（虎明本）の「ぬら〳〵」が、『能狂言』「虎寛本」では「竹生嶋参り」になっている。虎寛本は寛政四年（一七九二）の筆録であるから、本文としては波形本に遅れるが、享保九年（一七二四）の『大蔵弥太郎家書上』に「竹生島参」と見えるので、改題の時期は少なくともこの年以前に遡ると認められよう。

なお鷺流は全く別の「物真似」という曲名で、享保九年の『鷺仁右衛門家書上』以来通している。虎明本と天理本の「ぬら〳〵」では、本題の犬・猿・蛇・辰の話に入る前に、天理本の方には雀と烏が親子だという話が置かれているところが違う。それが「物真似」になると、雀がつぐみに変り、さらに猫と鳩が夫婦だとする類話が加わってくるのである。

「竹生島参」をきっかけに、天正本の価値を認めて下さった右記事は、同書紹介者として実に嬉しく、感謝の気持でこの一文を綴った。現行狂言の一曲々々には、皆このような時代と流派による流動の背景があり、それを究めることが狂言の理解を助けるものとなるのを、この機会に反省して置きたいと思う。（40・3・20）

—東京女子大学教授—

狂言空見

野村広二

三月は、梅若実（現六郎父）七回忌と観世左近二七回忌追善能が催され、どちらも、「鸚鵡小町」が梅若六郎と坂井音次郎で舞われた。このほか、今年は、杉浦義郎が喜寿の祝いにまい、宝生の別会（田中幾之助）と、名古屋でも、田鍋名匠鑑賞能（別会）に演ぜられることになっていて、楽しみが大きい。今月はその実翁のことを少し回顧したい。翁がまだ青年の頃、フェノロサが平田秀木（英文学者、能愛好者）にともなわれて、梅若の家をたずね、父の実現六郎の祖父）にあう。やがて六郎（現六郎の父）に謡曲を習う。もちろん平田秀木が付添いであるフェノロサー実ー秀木のみのりが、のちのイギリスとアメリカの新文芸運動（イェーツ、パウンド、エミー・ローエルたち）に大きな影響を与えていたのであった（矢野峰人「フェノロサと平田秀木」、土居光知「日本文学の英訳」）。実翁の生前、フェノロサのことを話したら、しばらく小首をかしげ遠い昔をおもい出される風に、案じておられたが、やがて、「お元気な方でした。」となごやかにひと言もらされた。当日は「隅田川」をまわれた記憶する。今年が能を愛したイェーツの生誕百年に当るのもゆかりが深い。

さて、狂言では「墨塗」（又・松・秀雄）がなかなかの秀逸。なお、前中日藤井文化部長の趣味展「能画ほか）、木彫とプラスチックと陶器の能面展（丸栄）、徳川美術館の装束展が同好者をよろこばせ、本では、随筆サンケイの「能を大衆へ」（四月号、沼艸雨）「飯沢匡狂言集」「文学と文明（朝日、福原麟太郎）「野村万蔵の芸」（図書二月号、加藤周一）など。四月は、茂山俳一（大蔵流）の忠三郎襲名披露の会）京都）に、伊勢の奉納能、岐阜県能郷（のーごう）の白山神社の能・狂言の行事と、目も足もますますいそがしくなります。

西行桜

西村弘敬

西行桜といふ曲は羽衣や舟弁慶の様な手近ひ曲とは違ひ、少々遠ひ方で余り繁々とは上演せられないのに、本年は珍らしく三月に宝生流で、又四月には観世流にと続ひて上演せられる事となり、何となく珍らしい感じがする。夫れについて私は先年京都の西山へ此の西行桜を見物に行った事があるので、少し古い事ではあるが其の思い出を語って見ます。

京都駅の西の次の駅に向日町（むこうまち）といふ駅がある、其の駅より西の方へ約四キロ（壱里）程行くと灰方といふ部落がある。それより右の方へ約千五百米ばかり行った右手に大原野神社といふ社がある。誠に清閑其のものといふ感じで実に何とも気分の良い処で、此の神社は昔の藤原氏の祖神春日大明神を御祭りした社で、之れが謡曲の小塩に出て来る大原野である。昔二条の后（きさき）が花見に来られた処であるらしい。此の神社より西に見える笠を伏せた様な美しい山が小塩山で、此の山へ登る麓の右手に花の寺といふ寺があって、これが昔西行法師が晩年住んで居た処である。其の寺の境内に垣で囲まれ高札を建て、西行桜がある。即ち西行法師が寵愛して眺めた桜で、今では何代目かの子孫らしい老木と若木が植えてあった。境内は小塩山の中腹で余り広くはないが、桜の木は随分沢山あって花の時は中々に見事である。境内より東南の方の展望もよろしく京都市街の南部一円が一望のもとに見渡せる又小塩山の頂上には淳和天皇の御陵があり此の寺へ来る途中には垣武天皇皇后の御陵もある。向日町駅より大原野神社の社道は「バス」や「ハイヤー」でも来られる。西行桜の謡曲の文に「所は嵯峨の奥なれど」とあるが、此の辺は嵯峨とは大分距てゝ居るのに一寸おかしく思われる。

五月の予告

五月二日　巽会

能　小鍛治　岡田寿子　安田侈子　西村弘敬
間　佐藤友彦

能　舟弁慶　平河滋子　荻曽光子　西村欽也
間　和泉保之

狂　因幡堂　佐藤卯三郎　佐藤秀雄

五月三日

能　蝉丸　伊藤健一　水野光子　一木茂
間　佐藤卯三郎

能　小袖曽我　武藤紀子　大林隆子
間　井上裕一

能　土蜘蛛　館繁雄　西村欽也
間　佐藤友彦

狂　文山賊　井上松次郎　井上礼之助
狂　芥川　佐藤秀雄　大野弘之

五月五日　真交会

能　蝉丸　六車真三
間　和泉保之

五月十五日　名匠鑑賞能　午后一時

能　鸚鵡小町　大西信久　高安滋郎
狂　金岡　和泉保之　井上松次郎

能　猩々乱　大西信彦　大西信弘　西村欽也

五月十六日　喜多会

能　景清　喜多実
能　小鍛治　長田驍
間　佐藤秀雄

狂　千鳥　野村又三郎　井上松次郎
　　井上礼之助

五月二十三日　金春会　一時始

能　源太夫　本田秀男　西村欽也
間　佐藤秀雄

能　望月　金春信高　高安滋郎
間　井上礼之助

狂　鎌腹　佐藤卯三郎　井上松次郎
　　河村丘造

五月廿九日　一謡会

能　清経　河村鉦二

五月三十日　清韻会　十時始

能　通小町　田村勇　西村弘敬

能　遊行柳　大槻秀夫　高安滋郎
間　野村又三郎

能　葵上　大槻文蔵　西村欽也
間　佐藤秀雄

狂　竹ノ子　井上礼之助　大野弘之
　　河村丘造

商品
食料
味噌
まり
酒
たし

むとう食品店

名古屋市昭和区川名本町1ノ10
電話　㊿　6264番

昭和40年5月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社　安井印刷所　電㊟4881

狂言人語

共同社

肌寒い四月がすぎ　新緑の五月のそよ風が心よい此頃となりました。今般田鍋惣太郎師藤田六郎兵衛師高安滋郎師が三月一日附を以て文部省文化財保護委員会から重要無形文化財の綜合指定を受けられました御喜び申しあげます今後益々御活躍を祈って止みません

今月は名匠鑑賞能を初め演能会が目白押しに並んでおります　予告を御参照の上多数の御鑑賞をお待ちしております。

五月五日夜は和泉保之師の小舞の温習会が福祉大学図書館ホールで開催されます。此一年の成果を結集して小謡に連吟に小舞に精進される同好の士の奮闘をぜひ御声援下さい。

五月の催能

五月二日　巽　会　午前九時半始
能　小鍛冶　岡田寿子　安田俊子　西村弘敬
間　佐藤友彦
能　舟弁慶　平河滋子　小木曽光子　西村欽也
間　和泉保之
狂　因幡堂　佐藤卯三郎　佐藤秀雄

五月三日　邦謡会　九時始
能　蝉丸　伊藤健一　水野光子　一木茂
間　和泉保之
能　小袖曽我　武藤紀子　大林隆子
間　井上裕一　館繁雄　西村欽也
能　土蜘蛛
間　佐藤友彦
狂　文山賊　井上松次郎　井上礼之助
狂　芥川　佐藤秀雄　大野弘之

五月五日　真交会　九時始
能　蝉丸　六車真三　西村欽也
間　井上松次郎

五月九日　霞会
能　鸚鵡小町　大西信久　高安滋郎
狂　金岡　和泉保之　井上松次郎

五月十五日　名匠鑑賞能　午后一時
能　猩々乱　大西信彦　西村欽也
大西信弘

五月十六日　喜多会　一時始
能　景清　喜多実　西村弘敬
能　小鍛冶　長田驍　高安滋郎
間　佐藤秀雄
狂　千鳥　野村又三郎　井上松次郎
井上礼之助

五月二十三日　金春会　一時始
能　源太夫　本田秀男　西村欽也
間　佐藤秀雄
能　望月　金春信高　高安滋郎
間　井上礼之助
狂　鎌腹　佐藤卯三郎　井上松次郎
河村丘造

五月廿九日　一謡会
能　清経　河村鉦二

五月三十日　清韻会　十時始
能　通小町　田村勇　西村弘敬
能　遊行柳　大槻秀夫　高安滋郎
間　野村又三郎
能　葵上　大槻文蔵　西村欽也
間　佐藤秀雄
狂　竹ノ子　井上礼之助　大野弘之
河村丘造

狂言解説

因幡堂＝大酒呑みの女房を持った男、妻を離縁して因幡堂に新しい申妻に出かける。それを知った女は腹を立て一計を案じてまんまとお告げの女となりすまし、それを知らぬ男は……

文山賊＝間抜けな山賊二人、さゝいなことから果し合いとなり、それに際して両人協力して書置を書くうち、急に命が惜しくなり、理由をつけて命乞いした末、仲良く連れ立って帰る。

芥川＝ちんばと生姜手の二人が道連れとなり、互いにかくしている不具を発見して嘲笑し合った末に取っ組み合いになる。不具者同志の取り合せです。

金岡＝花子。釣狐につぐ重い習物とされています。今回は和泉流宗家保之氏の演技でゆっくり御鑑賞下さい。

千鳥＝酒代のたまった酒屋へ酒を買いに出かけた太郎冠者。しぶる酒屋の主人を何んとかごまかしてついに酒を取って帰る。太郎冠者の苦心の一人舞台です。

竹ノ子＝隣の藪から地を伝って畑へ出た竹ノ子をめぐり、びっこの藪主と畑主との争いが始まりついには何か勝負をして結着をつけることになる。ユーモラスな事件を背景にくり広げられる話に狂言ののどやかさが感ぜられる。

狂言空見

野村広二

今年は寒い日がいつまでもつづいた。四月の伊勢神宮奉納能も、五日の金春流をはじめ、寒い日に催された。いつもなら、桜の花が舞台に散りかかるという趣のある一日だが、その花もほとんどひらいていず、参道の老梅の紅い色があざやかだった。それにひきかえ、十六日、名古屋東照宮の舞楽神事は、例年とかわり、陽光満開のなかで「蘇莫者」（そまくしゃ）「陵王」などがおこなわれ、なごやかな風景であった。それから雨。この頃、「虚子一日一句」（星野立子編）がでたので、能を愛し、能作もした高浜虚子のことだから、一句位は、能、狂言をよんだ句が入っていないかと、頁をくれば、やはりみつかった。四月十二日、「花の雨降りこめられて謡かな」。星野立子さんは、註に、京都の宿。「安倍（能成）、和辻（哲郎）両君来り、謡二番」（カッコ内虚子のメモ）しかじかと父の思い出を、短かく語る。昭和七年の句である。悲事一つ。中旬に岡谷惣助氏他界。同氏は名古屋能楽界にとって大事な人でした。謡をよくされ、狂言を好まれ、名古屋和泉会の発起人でもあったようだ。ついこの間まで、能楽堂へ足を運ばれ、元気なお顔をみせられたことは、いつまでも忘れられない。ご冥福を祈りたい。狂言は、新作の「悪女」（中日五流能、平岩弓枝作）。おなじ作者の第三の作品として、おちついた味は結構だが、一見、理解に苦むところが、筋と演技にあった。「雪まろげ」の印象がつよい。本では、「静かな影絵」（丸岡明）、「民謡の歴史」（松本新八郎）、芸術生活（五月号）の「能楽とアメリカ人」（喜多節世）に、「梅若忌」（中部経済・丸岡明・岐阜日々・戸井田道三）「黒川能」（東京新聞・丸岡明）など。五月は「鸚鵡小町」に期待したい。

白山神社の猿楽

――翁・三番双を見て――

名古屋から車で三時間、根尾谷の奥にひっそりと息づいている能郷部落へ四月十三日、毎年行われる白山神社の神事猿楽を見物に出かけた。

眼前に迫った山々はまだ白く雪を残し、桜にはかなり早いようだ。猿楽の始まりを告げるほら貝が静かな谷間の部落に響き、やがて「翁」を初番として能「難波」「田村」「羅生門」狂言「加賀越前」「鳥帽子折り」「鐘引き」が演ぜられた。「翁」は一般に能楽の中でも古体をとゞめているとされているが、こゝで演ぜられる「翁」はさらにその原型とも思われる様式を伝えている。面箱が登場し、軽く一礼して面さばきも行なわずすぐ座つく。やがて翁が自分で特に作法があると思われぬ仕草で面をつけると御囃子に合せ舞う。舞そのものは非常にゆったりした舞であるが動作は少ない。一通り舞うと座つきその間に裃姿の人が出て「これは某村某氏の御祈祷の翁」と告げて退く。そのあと又同じ翁の舞が舞われ、終ると例の裃姿の男が「これは……」こうして一通り終ると翁は退場する三番双が代って登場。荒々しい躍動を中心としたもみの段があり、それが終ると黒尉の面をつけて面箱の所へ行き鈴を受け取る。二人のやり取りの会話は現行の曲と殆ど同じである。そして次には鈴の段を舞い納めるのである。舞そのものには現行の様に非常に洗練された様式の美しさは当然見当らず、荒々しく粗野ではあるが、やはり粗朴な美しさと豊作を祈る豊民達の願いが現代に生きる我々にも充分に感じ取られるのである。

所でこの「翁」には千歳は登場しない。現行でも翁、三番双は共に老翁であり千歳は大体若々しい青年の舞なのであるが、古く世阿弥の頃まで逆のぼると式三番と呼ばれる演出で上演されたことが花伝書に見えているが、これは翁面の稲積の翁、三番申楽の代継の翁、父尉の三者をさし、三者共に老翁である。千歳が登場する様になるのはやはり世阿弥以後、この式三番の様式がくずれて行き、省略されて演出されたり、又、美少年を愛寵する様な時代の風潮から新しく登場する様になったと考えられるが、この能郷の猿楽でもやはり千歳は全く現れないのである。また、現行では三番双、面箱がはっきり狂言方でつとめるのであるが、こゝでは両者とも仕手方がつとめているのも興味のある問題である。狂言方と能楽を演ずる仕手方とがはっきりわかれて演ぜられる様になったのはいつ頃の時代であるか、そして「翁」が大体現在（この能郷の形式をも含めて）の様な形式で演ぜられる様になったのはいつ頃か、この能郷の「翁」が古来からこの様な役割で演ぜられて来たとするなら、「翁」の歴史は能と狂言とが分岐する以前の形式をそのまゝ伝えていると云う説を支えるわずかな根拠になるかもしれない。「狂言」に関しては特に色々気付いた点、興味ある問題が多々あるがそれについては次の機会に述べたいと思う。（T・S生）

六月の予告

六月五日　大衆能

一部　十時

能　羽衣　河村鉦二　高安滋郎
能　小鍛冶　片岡道子　大塚一二　高安滋郎
間　佐藤秀雄
狂　舎弟　井上義次　佐藤友彦　河村丘造

二部　二時半

能　花月　戸田秀雄　佐藤秀雄　西村弘敬
間　佐藤太俊　殿島修二　西村欽也
能　舟弁慶
間　井上松次郎
狂　鬼瓦　佐藤卯三郎　井上礼之助

六月六日　調友会

能　融　観世武雄　高安滋郎
間　佐藤秀雄
狂　朝日奈　佐藤友彦　井上松次郎

六月十三日　青陽会

能　鉢木　河村鉦二　高安滋郎
間　佐藤秀雄
能　百萬　武田太加志　西村弘敬
間　井上礼之助
能　石橋　加藤丈太郎　西村欽也
狂　胸突　柴田初太郎　井上松次郎　佐藤卯三郎

六月二十日　観世会

能　俊寛　柴田初太郎　西村弘敬
間　佐藤秀雄
能　松風　観世元昭　高安滋郎
間　井上祐一
能　車僧　橋岡久弥　西村欽也
間　佐藤卯三郎
狂　悪太郎　井上礼之助　河村丘造　井上松次郎

六月二十七日　宝生定式

能　野宮　宝生英雄　高安滋郎
間　井上松次郎
能　鵜　内藤泰二　西村欽也
間　佐藤友彦
狂　伯陽　井上義次　井上祐一　井上礼之助

石田特許事務所

弁理士　石田一
法学士

名古屋市昭和区都島町2の10　TEL ㊗1330

狂言

昭和40年6月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方 ㊡1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所 ㊡4881

狂言人語

共同社

医療費問題・東京都議問題・森脇事件・等に加えるに全国的に天明以来の冷害が叫ばれる此不順気候は山積した事件と共に前途の暗さを思はせます。六月の陽光と共にスッキリと晴れやかにしたいものです。

七月四月は恒例の第七回朝日狂言会です。御期待の山本則寿山本則直兄弟の来名は必らず皆様に御満足願えると存じます。

八月二十二日は文化講堂で大衆能の計画があります。皆様の御観賞をおねがい致します。

六月の催能

六月五日 大衆能

一部 十時

能 羽衣 河村鉦二 高安滋郎
能 小鍛冶 片岡道子 高安滋郎
間 大塚一二
狂 舎弟 山本光次郎 佐藤友彦
井上義次 河村丘造
二部 二時半
能 花月 戸田秀雄 西村弘敬
間 佐藤秀雄

能 舟弁慶 佐藤太俊 西村欽也
間 殿島修二
狂 鬼瓦 井上松次郎 井上礼之助
六月六日 能 融 調友会 観世武雄 高安滋郎
間 佐藤秀雄
狂 朝日奈 佐藤友彦 井上松次郎
六月十三日 能 鉢木 青陽会 河村鉦二 高安滋郎
間 佐藤秀雄 佐藤友彦
能 百萬 西村弘敬
間 武田太加志 井上礼之助
能 石橋 加藤丈太郎 西村欽也
柴田初太郎 井上松次郎 佐藤卯三郎
狂 胸突
六月二十日 能 俊寛 観世会 柴田初太郎 西村弘敬
間 佐藤秀雄
能 松風 観世元昭 高安滋郎
間 井上祐一
能 車僧 橋岡久弥 西村欽也
間 佐藤卯三郎
狂 悪太郎 井上礼之助
六月二十七日 能 野宮 宝生定式 宝生英雄 高安滋郎
間 井上松次郎
能 鵜 内藤泰二 西村欽也
間 佐藤友彦
狂 伯陽 井上義次 井上祐一
井上礼之助

狂言解説

舎弟＝訪れる度に兄から舎弟と呼ばれる弟、舎弟とはどういう意味かを知らず知人に尋ねた。男は悪戯に舎弟とは盗人のことと教えたので、さあ怒った弟は……

鬼瓦＝本国へ帰る大名、途中因幡堂の屋根の鬼瓦を見て故郷の妻を想い出し思わず落涙する。だが愛しい妻に逢えるのもあとわずか、大名は喜びいさんで本国へ帰って行く。

朝日奈＝無常の風に誘われて冥土にやって来た朝日奈、六道の辻で閻魔王と出合う。地獄へ責め落さんとの閻魔王を軽くあしらい、遂には七ツ道具を背負はせて極楽への道案内をさせる。

胸突＝借りた米の返済を迫られた男、相手が少しばかり胸を突いたを口実に肋骨が折れたと脅迫し遂に借状を取り返してしまう。いつの世にもこうした男はいるものです。

悪太郎＝無頼者の悪太郎、長刀を持って伯父を訪れ酒を飲んだが、寝入った所を伯父に髪を剃られてしまう。目覚めた悪太郎は心から自分を悔いやがて弥陀に帰依することとなる。

伯陽＝同じ所へ同時に琵琶を借りに来た勾頭と座頭、一つの琵琶をはさんで勝負をすることになった。歌を詠み、そしてとう〳〵盲目どうしの相撲となったが果してその結果は……

狂言空見

野村広二

徳川美術館の「源氏物語絵巻」が、美術生活（六月号、嘉門安雄）に紹介され、片や、同館が、円空彫刻といっしょに、ベルリンへいく、能や「唐人相撲」の装束ほか有名な美術品展示を開いたのは、近頃これだけでも、心のほのぼのとするたよりだった。さて、六月の「松風」（元昭ほか）「野宮」（英雄）への期待は別にして、一月からの演能では、まず「西行桜」が鎮之丞と宝生九郎の二回、松本謙三の放送を（NHK）をいれると三回も楽しめた。「殺生石」も豊嶋弥左ェ門（女体）と英雄（白頭）の二回。「景清」もそうで、喜多実と猶義。「楊貴妃」（元正）、「忠慶」（金春信高）「鵜飼」（伊勢、本田秀男）、「邯鄲」（後藤得三）、「安達原」（万三郎）「道成寺」（梅若盛義）、金剛巌の「屋島」と「絵馬」などの好演があったほかに、「鵜鵜小町」と金春流の「源太夫」（げんだゆう―、本田秀男）の上演は特筆に価しよう。昨年の演能ノートをくると、わたしのベスト・テンのなかばは、金剛流が占めているが、今年の名古屋では、喜多の能もみられるようになり、東京や京都・大阪・奈良にゆかれない私にとっては名古屋だけでも、割合豊かになったといえよう。狂言では「松ゆずりは」「二人大名」「松囃」に「墨塗」の四番と「道成寺」の鐘つりの四青年の活躍があげられるくらいで、さみしく、今後にまつところが大きい。稀曲の「源太夫」は、金剛の「絵馬」同様、佳曲であった。シテの名が曲名であるこの曲は、出雲と熱田神宮を結びつけた構成で、静かな老人夫婦（実は八またの大蛇の退治のときの老人夫婦）の前半は絶品。「楽」（がく）をまう後半は、同神宮の舞楽によせて想像してもすばらしかった。シテに太鼓の役と名のらせ、終り頃、「還城楽」（げんじようらく）のことばで、終末をおもわせると同時に、

この舞曲の一名「見蛇楽」（けんじゃらく）から、曲趣の一端をしのばせるなど、それに、神剣の威徳を強調せずに、シテこそ東海道の守り神であると語ることも、おもしろい趣向。ただ「楽」が舞楽の走り舞とはおゝよそ遠く、太鼓の役のいわれがはっきりしないのが、気になった。同日、熱田神宮と知立神社で東西の能研究者で古面の見学のあったことも書き添えたい。

なお、この間（あい）狂言は神妙。「鸚鵡小町」はシテが観世流（大西信久）で、実におだやかな味で、胸もとから上のカタチはいつまでも忘れられないが、今少しせまるものがほしかった。後日、親しいT氏に話すと、では「老女物の位」はときかれて、「あの位」が、観世の「鸚鵡」の位とおもいましたと、こたえただけで、闌位（らんい）とか「杉の木」、「冷え冷え」「なにもせぬ」、それと「神さびにけり香久山の」に「忍ぶれど色に出にけり」の和歌などをもちだして、考えることをきいてもらうこともしなかった。「鸚鵡」と「源太夫」の印象はまことにつよい。本では「日本の伝統的文化」（田代秀徳）、「私の人生観」「古典美への旅」（亀井勝一郎）、「補巌（ふかん）寺納帳の疑問点（国語と国文学五月号、金井清光）、「イェーツ生誕一〇〇年記念特集」（英語研究六月号）、「フランスの日本文学研究」（朝日、五・二六、小沢正夫）「野口判官・断片」「義経の周囲」、（朝日五・二二、大仏次郎）「芸能史研究」（第八・九号）。

六月は、五日の調友会で、「一声、出端のハヤシ」の解説があり、六日、熱田神宮大祭奉納能がおこなわれる。盛会を期したい。

あつた

西村弘敬

名古屋市の一部に熱田（あつた）という地区がある。此熱田というのはいつの頃からの名前か、又其地名の出来た謂は色々とあるらしいが、其詮索は別としてとにかくに「熱田」と書いて「あつた」と読ませるのは少々無理の様にも思はれるが、我国では人名地名などに常識的な読み方では通らない特別の読み方のものが随分ある様で、此熱田なども其一つであると思う。

昔は此熱田は「宮の宿」（みやのしゅく）と称へられた。そこで吾々が謡っている謡曲の中にも此の名前が出て来る。

「景清」の謡の中には「ひととせ尾張の国熱田にて、遊女に相馴れ」とあり又「盛久」の謡の中には「熱田の浦の夕汐の、道をば波にかくされて」と出ている。五月二十三日熱田神宮能楽殿にて催された金春会の能に珍しく「源太夫」という曲が上演された。此曲は金春流にだけある曲で、熱田神宮の摂社で「上知我麻神社」という社に祀られてある神で、謡の文によれば大昔簸の河上（ひのかわかみ）で素佐之男尊（そさのをのみこと）が大蛇（おろち）退治の時に、尊の妃となった稲田姫（いなだひめ）の父で、（あしなづち）の老翁が名を替へて源太夫の神となって現はれ東海道の旅人の安全を守っているとなっている。此社は現在は熱田神宮の南門前の西横にあるが、元は神宮正面の浜通りにあって、旧東海道通りが東より来て行き当りになる処に東向きの場所にあったが、道路改修の為め約二百米ばかり北の方へ移転された。そして其名前も一名智恵の文珠と呼ばれているが、これは明治以前神仏混同時代の名残と思う。

此熱田の地は相当古くからの町で源平時代には既にあった様で「名古屋」は徳川義直の名古屋築城後に出来た町であるが、熱田はずっと古くからの町である。而して此熱田を中心として近傍の名所などを近江八景の真似（まね）をして熱田八景を撰み、詩歌などが読まれてあるのでそれを御参考までに披露する。

一、星崎秋月（ほしざきのあきのつき）

焼塩煙散海門晴　此地三秋月在名
一夜星稀天弥爽　山光水気映東明
澄む空の光もみちて星崎や
星も消さるゝ秋の夜の月

一、音聞暮雪（おときゝのぼせつ）

茲山近接八琴村　薄暮玲声雪片飜
唯有松声枝上在　天光一色白乾坤
音聞の名にたがひつゝ積りては
山の静けき雪の夕ぐれ

一、横田の落雁（よこたのらくがん）

秋風八月雁連天　自以雲間結字懸
日暮相呼芦荻裡　一行斜落御供田
鳴かはしみ空を選み一と列は
横田に落つる秋かりの音

一、高蔵夜雨（たかくらのよるのあめ）

神灯影暗夜正陰　桧杓林中黛色深
元識高蔵幽静地　風煙寂莫雨無音
雨そゝぐ梢を高み暗き夜に
かげ打ちしめる庭のともしび

一、呼続晴嵐（よびつぎのせいらん）

海上煙嵐日々晴　山光一色似藍清
晩潮帰去斜陽裡　呼続浜頭松有声
雲はろふ嵐に晴れて呼続の
浜の名ちかき松の村立

一、亀井の晩鐘（かめゐのばんしょう）

古寺千年第一名　松杉影暗夕陽似
亀井山上風煙裡　彷彿鐘声和水声
寺の名も万代ふりて亀の井の
水に声すむ夕暮の鐘

一、二名夕照（ふたなのゆふしょう）

萩芦花発二名塘　白鷺窺思立敗梁
野樹畑収橋上晩　往来人影水中長
斜めにも入日や水に映ろひて
二名の橋の影ぞ流るゝ

一、知多帰帆（ちたのきはん）

海上潮来水接天　雲煙一抹望中連
西山日落知多晩　帆影斜懸大小船
夕日さす知多のうらわの追風に
真帆引はへて帰る釣舟

（文化十五年頃の写本より）

七月四日　朝日狂言会

午後一時始

狂言　腰祈　佐藤卯三郎　野村又三郎　佐藤友彦
狂言　水掛聟　高井則安　山本則寿　山本則直
狂言　名取川　和泉保之　河村丘造
狂言　茶壺　山本則寿　山本則直　高井則安
狂言　止動方角　井上松次郎　佐藤秀雄　井上礼之助　井上義次

小舞　暁　石田喜樹
小鼓　柳の下　山本光次郎　大野弘之
七ッ子　井上祐一
海人　和泉保之

主催　朝日新聞社　名古屋共同社

事務所　中区裏門前町五ノ二　井上松次郎　三二一一四三〇

山科にて

名古屋東区の教順寺に在った「狂言大夫山脇和泉家流伝統之碑」に山脇源助（道仙）山脇五郎左右ヱ門（道意）山脇元信（道甫）の三代について述べたあと「以上三世住千京故其墓在山科西野村西宗寺云々」とある。今はあるもないもわからぬ寺をこれだけをたよりに過日機会をつくって山科を訪れた。現在山科西野町、大分尋ね廻った末に駅から南々西二㎞（？）あまりの所、現在老人ホームのある西宗寺を発見した。本堂の横、夕陽にひっそりした小さな墓地がある。その墓地の片隅荒れ果てた本堂の傍に山脇三世はとり忘れられた様に眠っていた。石塔の頭だけが石ころなどと全く同様にとりかたづけられ、それは本当に眠っているという風であった。（写真右端が道仙、山脇と見えているのが道意、そのすぐ後の黒い石が道甫）このまゝにしておいたなら必ず次にはどこかえ行って所在すらわからなくなる。なんとかしなければ、と、忘れられ眠っている墓の前でいつか現実的な考えを抱いていた。

（TS生）

白山神社の猿楽

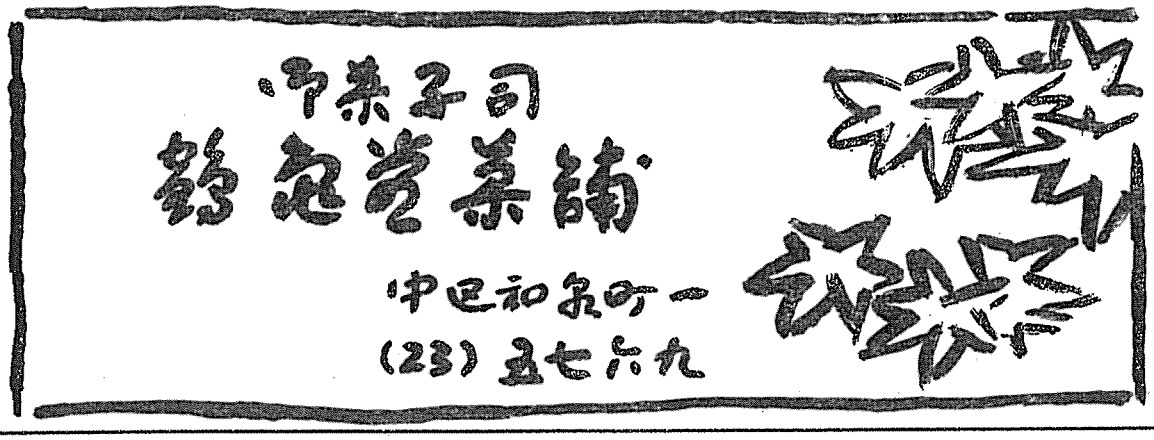
――狂言について――

前号では「翁・三番叉」について触れたが、今回は狂言について気付いたことを述べて見たいと思う。何分、ふと思い立ってぶらりと出掛けた風のもので何の予備知識ももたず、新聞の切り抜きと弁当にカメラをぶらさげ、あとは同行のO氏まかせであったので細かいことは何もわからず、従って断片的なことしかわからなかったが、それでも随分興味深いものであった。

演ぜられた曲数は三番、「百姓狂言加賀越前」「鳥帽子折」「鏡引き」であるが、まずこの「加賀越前」は現行曲では「松楪」と殆ど同じである。この題名は松と楪とを納めに上る百姓がそれぞれ加賀の国と越前の国の百姓であることから来ているのであるが、現行の「松楪」では二人の百姓は和泉国と摂津国になっている。現行曲で加賀、越前の百姓が登場するものには「餅酒」があるが、こゝ白山神社の猿楽狂言の題名にも「餅酒」と見えており、おそらく現行曲と殆ど同じと思われるが果して両国のお百姓は加賀越前であるかは不明である。現行曲と殆ど同じに展開され、最後にお流れをくだされたあと、奏者が「両人して今一度吟じて見よ」で二人立ち上り舞い始める。現行では三段の舞のある所だがこゝではもちろんない。そのうち御奏者も立ち上って三人そろってにぎやかに舞いながらとめる。

「鳥帽子折」は現行曲の「麻生」と殆ど同じ。天正六年の「天正狂言本」には「えぼしあさう」とあり、万治三年の「狂言記」巻一に「鳥帽子折」として見えている。天正本の冒頭の演出が少し異なる他はこゝ白山神社のものも含めて殆で大差はない。この曲は主人の麻生が下人に髪を結わせる動作があるので最近の頭では不可能であるしその結い方をも正確には結える人が少なくなっているため殆ど上演されなくなっているが、こゝで演ぜられたのは殆どその動作をしない。主人が見物に背中を向けて座付き、下人がその後に廻って見物には見えぬ所でちょっとした仕草をして見せるだけである。古来からそうした演出であっさりすませているのか、それとも昔は実際に髪を結ったものゝ、近来便宜上この様に変化して来たものかは興味ある問題であろう。あとは殆ど現行曲と同じで、よく狂言として整理されている。

「鐘引き」は現行曲では全く見当らない。次郎右ヱ門という商人が妻に留守を申しつけて、商いに出かける。入れ違いにしばみの坊主が登場。実はこれが女房の間夫なのである。女は家へ招じ入れ酒盛りを始める。所がそこへ以外に早く次郎右ヱ門が帰って来てしまう。そこで女は坊主を鐘の中へかくし、修理にあづかった鐘だとごまかすが、次郎右ヱ門は見苦しいから捨てろと云う。押し問答の末、女は嘲し物で嘲して引かねば外へ出ぬと云う。そこで二人で嘲しながらつなで鐘をひっぱるのである。他の二曲がかなりよく整理され、現行曲と殆ど大差はないのであるが、この「鐘引き」はずいぶん荒



さが残されている。まずストーリーそのものであるが、一般に狂言には男が浮気をするという話はよくあるのであるが、女が間夫をもうけるという話はほとんど出て来ない。しかもその相手が僧職であることも興味ある問題であろう。狂言が近世初期になって激しい流動期から固定期への流れの中で支配者たる武家階級の文化として位置づけられるのだが、室町末期から江戸時代へと幕藩体制もようやく整って来ると、やはり狂言もそれに見合った存在でなければならなくなって来る。下人層の生活、思想の面でも、男が浮気をすること丶女が間夫をつくることでは格段の相違があったのであろう。しかも相手を僧侶として狂言するという皮肉は許されないものであったかもしれない。ともかく現行曲には見当らないのである。又、この狂言の中には次郎右ヱ門と女房とのやりとりに猥雑なせりふがあったり、最後に間夫を見つけての次郎右ヱ門の卑俗的なすてぜりふめいたものも残されているが、これらも狂言がその変遷の中で排して行ったものである。

以上、個々の狂言について少しばかり気が付いたことを述べて見たが全体的に見て、舞台芸術としての狂言、という性格は少しも感ぜられなかった。

しかしながら神に奉納する素朴な農民達の伝統、そこに我々は本当の日本古来の狂言の姿を見出さなければならないのかもしれない。ともあれ、見物を主対照とした演出とは全く異るのである。またせりふは全体に早口で一本調子であり、時には方言なども感ぜられるし、めりはりは殆どない。

また「……でござある」というせりふも波形本以降には全く見当らない中世的な用語である。狂言という性格からも伝承が極めて困難なものを、（かなり混同もあらわれているのであろうが）これだけ正確に今日、飛騨の山奥に伝えているということは、その歴史をさぐる上に極めて大きな価値をもつものであろう。

（TS生）

七、八月予告

七月　四　日　朝日狂言会（別項参照）

八月二十二日

能　巴　間　大衆能（文化講堂）　大塚一二　井上祐一　西村欽也

能　放下僧　間　戸田秀雄　佐藤秀雄　西村弘敬

能　紅葉狩　間　柴田収武　山本光次郎　高安滋郎

狂　犬山伏　大野弘之　井上松次郎　佐藤卯三郎　井上礼之助　佐藤友彦

協会よりの御知らせ

西村欽也氏　能道成寺披　高安社中
小木曽光子氏　能舟弁慶披　辰己社中
平川滋子氏　能舟弁慶披　辰己社中
岡田寿子氏　能小鍛冶披　辰己社中
安田俊子氏　能小鍛冶披　辰己社中
三木美智子氏　囃子披　殿島社中
奥田薫　氏　囃子披　殿島社中
神辺要市氏　能土蜘蛛披　加藤丈社中

舞　見　中　暑

一謡会　河村鉦二
石井会　西尾孫太郎
藤門会　加藤良久
長生会　鬼頭八郎
中部金春会　前田昌広
竜吟会　藤田六郎兵衛
観衛会
霞会　田鍋惣太郎
観水会　野崎太郎
観正会　久田秀雄
春星会　片岡道子
高安会　高安滋郎
たなびき会　田鍋惣一郎
鼓雲会　内藤泰二
調友会
名古屋能楽鑑賞会　田鍋惣太郎

名古屋能楽倶楽部　植村真太郎
風韻会　殿島修二
幸友会　福井啓次郎
金剛流松風社　片野東四郎
掬水会　柴田初太郎
曲水会　増田一雄
金竜会　金森準三
春鶯会　山田仁三郎
正楽会　加藤丈太郎
松謡会　佐藤太俊
清風社　大塚一二
掬水青陽会
能楽協会　名古屋支部　支部長　田鍋惣太郎
名古屋　和泉会
狂言　共同社

（イロハ順）

昭和40年9月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(541) 4881

狂言人語

恒例の大衆能もすんで、いくらか秋風の立つ気節となって来ました。今年は台風の当り年とか、十七号のよろめき台風もたいした影響もなく過ぎ去り十九・二十と後がつかえているようですが、大きな被害のないようにしたいものです。

六月二十七日宝生定式能の夜、共同社の同人、山本光次郎氏が急逝されました。同日も装束付けに鏡の間にと一生懸命働らいて居られましたのに突然の事とて同人一同呆然たるものがありました。心から追悼するものであります。

扨、芸術の秋、九月の登場です。又々世界の舞台で活躍が期待されます。狂言も今秋は、野村一家の訪欧が計画されて居ります。

大本教の出口京太郎氏の著書「エスペランド国周遊記」については先般御紹介致しましたが、アテネのパルテノン神殿を臨むリカビドス山の裾野の高地にあるアテネ工芸学会の中庭で、一管や独調、謡曲を演奏した感激が綴られている。十三夜の月に映えるアクロポリスの丘、パルラノンの神殿、に唸々と流れる孤管の調べ、笛の音の清々しさと、荘重な謡曲、素適な雰囲気をもり上げている。

九月の催能

九月十二日　邦謡会　正午始

能　熊野　柴田收　西村欽也
能　天鼓　梅田邦久　高安守彦
間　佐藤秀雄
狂　狐塚　井上松次郎　井上礼之助　佐藤友彦

九月十三日　松謡会

能　松虫　佐藤太俊　高安滋郎
間　井上松次郎
狂　柿山伏　井上礼之助　大野弘之

〈狂言解説〉

狐塚＝狐塚の田へ群鳥を追いに出かけた太郎冠者の憶病から平和な豊作の田園はとんだ狐騒動が持ち上がります。陰狸＝主に陰して狸を捕っていた太郎冠者、狸を売りに市へ出掛けた所を主に見つけられ、大あわてゞかくしたものゝ……。

伯母ケ酒＝酒屋をやっている伯母がなんともけちで中々酒を振まってはくれません。そこで鬼の面をかぶっておどして酒を呑もうとしますが……。

吃り＝吃りのために夫婦喧嘩にも苦労する男、謡いで妻のことをさんざんにいゝなして日頃の憂を晴らします。

子盗人＝ある家へ盗みに入った男が見つけたのは可愛らしい乳児。その可愛らしさに男は自分の立場も忘れて一心に子供をあやし始めていました……。

狂言空見

野村広二

きようは共同社の装束干しの日だなとおもいながら、日曜日とて、残暑きびしい家のなかに、寝ござに人工の風でうとうととする。八月二十九日のことである。その日の朝日「セトモノ随想」（朝日、北川民次）は、能の世界に当てはめてもおもしろかった。それから、故高見順氏詩集「死の淵より」の一篇「帰る旅」も「帰れるから／楽しいのであり／旅の楽しさを楽しめるのも／わが家にいつかは戻れるからである／……／この旅は／自然へ帰る旅である／楽しくなくてはならないのだ／もうじき土に戻れるのだ／……」のあたり、能の神秘とまさに相通ずる。同氏とは、春日、興福寺の薪能、二十八年の三月と記憶するが、春日の社頭、呪師（しし）走りの儀を、同じ場所に肩をならべてみていたことを思い出す。さて、夏の一夜、辱知の国文学のM教授と、暑さしのぎの柳川なべの店をたずねる。フランスの学者ルネ・シフエール氏の能の本をみせていただく。「世阿弥―能の伝書」ともいうべき題。能は「ドラマ・リリィク」となっていた。先生の流ちようなフランス語で、序論と「殺生石」をよんでいただく。「花鏡」の「目前心後」のくだりをとおもいながら、杯を口にする方が急しくなり、話もほかへ移っていってしまった。他日に講読をお願いしたいとおもった。

次に、八月二十二日の大衆能の狂言「犬山伏」はおもしろかった。放送では、日本の伝統の「面」（NHK、六月）、「松風」（六郎）と「隅田川」（元正）、これは渡欧能一行の出演（NHK、八月）。五島美術館展の「伊勢、東下り」（宗達）と「源氏絵巻」が印象にのこる。本では、「昭和の能」（大河内俊輝）、「円朝忌」（八・二二朝日ジャーナル、西山辰之助）、「茶の木」（木山捷平、太宰治の項、第二〇〇頁）、「世阿弥芸術の背景」（西一祥）、昨年の「音阿弥年譜」につついて力作。ほかに「幽玄なる女性とおかしき女」（国文学解釈と鑑賞、八月、中村保雄）など。

秋の演能に期待したい。

（随想）せんせい

西村弘敬

先生という語は、本来学術技芸其他何事によらず一段と勝れたる人に対する敬語であって、一般には学校の教師医師、弁護士、政治家、其の外、諸芸の師匠などの敬称的呼び名に用いられるのが普通であるが、時には又侮蔑的の代名詞として用いられて、先生とは先ず生きるなどとか、甚だしいのに先生と云われる程の馬鹿でなしなんていう事さえあって、先生と呼ばれるのも時と場合によっては良い気になっては居られない事さへある。作家の今東光氏の毒舌集の中にあったが、流行歌手の美空ひばりや三橋美智也などに、其母親自身が自分の生んだ小娘や小せがれを先生と呼んで居るとかで全く阿呆らしくて口もきけないと書いてあっ

だ。これは本当かどうか知らないが、兎に角に斯ういう事になると先生という語の価値にも色々の段階がありそうだ。

謡曲の宗教

西村弘敬

吾々が常に謡って居る謡曲は、今から凡そ六百年程前に出来たとの事で、此の中には色々の宗教的の匂いの深いものもある。其の内我が国特有の惟神（かんながら）の神道を取り入れたものが沢山あって、外には支那大陸より渡って来た儒教と仏教とである。西欧の基教（キリスト教）や回教（ブイフイ教）などは全然用いられて居ない。

仏教でも渡来後これを広めるのに、其の当時は我国民の間には惟神の道が盛に行はれて居て、新らしい仏教は中々に広める困難が多かったので、本地重跡説と云う便宜な説を案出して、本地は仏菩薩で神々は其重跡であるという風に説いて人心を獲得し、これが明治維新の際迄神仏混淆の形で行はれて居た。（羽衣）の謡の中に（南無帰命月天子。本地大勢至）などとあるもこれであって、謡曲発生当時は既に此の本地重跡説が行なわれて居たものと見え、謡曲の所々に斯様の点が見られる、神仏混淆も明治五六年の頃に廃仏毀釈が行はれ、神社と寺院とは判然と区別され、寺院などで取毀しの憂目（うきめ）を見た物も相当あった由であるが、謡曲では昔のまゝで少しも改作してないので、今の人から見れば神か仏か判然としないものが幾らも出てくるのである。神仏混淆時代には神社には神宮寺という寺があって、其住僧が祭事経営等一切を取扱い、神官は其の下に使用人の様に使はれて居た由である（女郎花）の曲の中に（法の神宮寺有がたかりし霊地かな）とあるのが此の神宮寺の事である。

謡曲の中にある宗教を至極大ざっぱに調べて見たれば、神道関係の曲は約四十番ばかり、仏教では念仏宗関係のものと法華宗関係のものが共に約十五六番程あり、禅宗らしいもの十二三番其他宗旨の明かでないが仏教らしいもの多数あり、又全然宗教の匂いのないものも相当多数ある。特に或る宗旨の宣伝用と見られるものは、真言宗の高野物狂、法華宗の現在七面、身延など念仏宗の誓願寺、遊行柳、実盛、当麻など相当沢山ある様に見受けられる。

沙石集と附子

大蔵弥右衛門虎明の記した「わらんべ草」巻二、十九段に「昔より作りたる狂言は宇治の拾遺にても一二番作りたる御座候、沙石集にても磁石と附子と作り申候」とあるが、こゝではその「沙石集」巻七、「慳貪者の事」の一章を御紹介しよう。

ある山寺に慳貪なる房主ありて粘桶を一つ持ちて只一人ある小児にいさゝかも食はせずして「これは人の食へば死ぬる物ぞ」とて只一人食ひてはよくおきおきしけるを、この児いかゞして是を食はましと思ひて房主他行のひまに棚に高く置きたるを取るほどに髪にも小袖にもうちこぼしてつけたりけり。日比欲し〳〵と思ひけるまゝによく〳〵二三盃食ひて房主の秘蔵の水瓶を雨だりの石に落して打ちわりて房主の帰りたる時しく〳〵立く「何事ぞ、けしからずの泣きやうや」といへば「あさましき事の候、御水瓶をあやまちに打ちわりて候時にいかなる御勘当もやと思ひ候て命生きても由なく覚えて人の食へば死ぬと仰せられ候物を一盃たべ候へども死なれ候はず二三盃食ひつれども死なれ候はず髪にも小袖にもつけて死なんとし候へどもすべて死なれ候はず」といひける。

現行狂言ではこれを主と二人の従者とし、「一口食へども死なれもせず、二口食へどもまだ死なず……十口余り皆になるまで食うたれど死なれぬことのめでたさよ、何ぼう頭かたの命かな」と謡わせ、主に追い込ませると云う演出であり。なお古く天正狂言本にまでさかのぼると「ふすさたう」として見えており、登場人物も「はうす一人出て二人よひ出す」とあって「沙石集」のおもかげがいよ〳〵濃い。この沙石集は無住法師の著によるものであり、「世間浅近の賤しき事」をあげて説法法談の一助としようとして書かれたものである。そして当然のことにこの「慳貪者の事」でも次の様に結んでいる。「慳貪なるはまさる損なり、少し食はせたらば水瓶は破られじかし、児の心が賢かりけり」狂言「附子」はこうした法談から見事脱化していると云えるだろう。

十月の予告

十月三日 中部金剛会

能 通小町 金剛 厳 西村欽也
能 紅葉狩 片岡道子 高安滋郎
間 井上祐一 佐藤友彦
狂 陰狸 佐藤秀雄 井上松次郎

十月十七日 橋岡三回忌 清韻会

能 安宅 橋岡久共 高安滋郎
間 和泉保之 井上松次郎
能 羽衣 高橋静夫 西村欽也
能 隅田川 観世元正 岡治郎右ェ門
能 天鼓 下田雄三 奥善助 西村弘敬
間 井上祐一
狂 伯母ケ酒 野村又三郎 佐藤卯三郎
狂 吃り 和泉保之 井上松次郎 佐藤友彦

十月二十四日 名匠鑑賞能

能 放下僧 大江又三郎 福王輝幸
間 井上松次郎
能 三輪 金春信高 福王茂十郎
間 和泉保之
能 道成寺 観世喜之 福王茂十郎
間 佐藤卯三郎 佐藤秀雄
狂 子盗人 和泉保之 井上礼之助 井上松次郎

十月三十一日 掬水会

天鼓 柴田收

協会よりの御知らせ

浅野圭子氏 囃子方 山田社中
若尾和佐女氏 囃子方 山田社中
近藤かすみ氏 囃子方 山田社中
中條昭江氏 囃子方 山田社中
上野智永氏 囃子方 山田社中
神田佳代子氏 囃子方 梅若猶社中
菊池敏子氏 囃子方 梅若猶社中
近田志津子氏 能班女方 竹内社中
池田允子氏 囃子方 殿島社中

狂言

昭和40年9月1日発行
発行所
名古屋市中区栄門前町5ノ2
井上重兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(541) 4881

狂言人語

台風二十四号が大暴れ、二十五号が海上へ逃走、追いかけるように二十六号と全く応接にいとまがありません。それと同じく、十月は、中部金剛会、橋岡追善淡交会、名匠鑑賞能と矢次ぎ早やに目白押しに大会が列んで壮観です。正に芸術の秋、皆様の御鑑賞を心からお待ち致しております。

十一月二十日、和泉会の公演が決定しました。一人狂言、見物左衛門の名古屋初演を初め、鉢叩、鏡男、三人片輪の三曲小書付きと盛沢山の好番組を取揃え、三宅藤九郎氏、三宅右近氏の来演を得て宗家和泉保之氏が熱演されます。御期待下さい。

十月三日　中部金剛会
能　通小町　金剛　厳　西村欽也
能　紅葉狩　片岡道子　高安滋郎
間　井上祐一　佐藤友彦
狂　陰狸　佐藤秀雄　河村丘造

十月十日　中部金春会
能　安宅　和泉保之　井上松次郎
間　羽衣　高橋静夫　西村欽也
能　隅田川　観世元正　岡治郎右エ門

十月十七日　橋岡三回忌　淡交会
能　天鼓　下田雄三　奥善助　西村弘敬
間　伯母ケ酒　野村又三郎　佐藤卯三郎
狂　吃り　和泉保之　井上松次郎　佐藤友彦

十月二十四日
能　放下僧　大江又三郎　福王輝幸
間　井上松次郎
能　三輪　金春信高　福王茂十郎
間　和泉保之
能　道成寺　観世喜之　福王茂十郎
間　佐藤卯三郎　佐藤秀雄
狂　子盗人　和泉保之　井上礼之助　井上松次郎

十月三十一日
天鼓　柴田敏　井上祐一
間　清水　井上礼之助　井上松次郎
狂

狂言解説

隠狸＝主に隠して狸を持っていた太郎冠者。何とかして狸を取ってやろうとする主と、取られまいと苦労する冠者とのかけ引きが始められます。

伯母ケ酒＝酒屋の伯母を持った男。何んとかして振舞酒にありつこうとしますが、伯母はどうしても首をたてに振りません。そこで鬼に化け、酒にありついたまではよかったのですが――吃り＝云いたいことも云われず、いつも女房にいびられてい　ぶれな男。今日は吃りで云われぬ文句を小謡にして日頃の憂を晴らします。

子盗人＝赤児があまり可愛いので自分が盗人に入ったことも忘れて一生懸命あやし始める間抜けな憎めない盗人を扱ったものです。

清水＝野中の清水へ水を汲みに行けと云いつけられた太郎冠者、鬼が出たと偽って桶を放り出して来ます。主が取りに行くと、冠者はあわてゝ鬼になり、主をおどし、日頃の人使いの悪さまでもあらためさせようとしますが――

狂言　見空二

広村野

九月十九日、京都に「鸚鵡小町」があった。金剛流種田嘉一十三回忌追善能における、種田次郎氏の亡兄への手向けの能で、昨年の家元厳君の「卒都婆小町」につゞいて、金剛流久々の上演である。弱々しくて重々しく、おゝらかでのびのびとしていて、しかも、どこか故金春八条とも似た感じを与えた。それに、舞はみごたえあったうえに、ワキとのやりとり（ことば）も巧みであった。このとき、高速バスで行った台風のあと、よく晴れた秋空の下で、彼岸花の紅が路線のいたるところで、紅入りの唐織のように、目に鮮かだった。前夜は台風二四号の通ったあとの月が、大きく、西爪を割ったように、東の低い空にかかったり、薔薇の花びらもふちが色かわり、秋をしみじみと味わせたが、あの台風がとおり過ぎる頃、鐘たたきがカチカチと鳴きだしたのには、古いことばながら万感しかじかといった心持だった。それにしても近頃古典芸能関係者の耳に親しい岐阜県の能郷では、文化財の能、狂言関係はどんなだったか案ぜられる次第です。みなみな無事であることと損害ができるだけ少ないように祈りたい。

話かわって、九月三日から九月五日まで、能・狂言のギリシャ公演は盛況であった由。「松風」や「蝸牛」（かぎゆう）はうけたが、「隅田川」はむつかしかったようで、「あの月をみたまへ。月まで能に満足して一晩ごとにふくらんでいる。」と見物のことばも伝えてきている（毎日、九・一六。東京、九・一八）。月夜だったらしい。また、スラブ歌劇をご覧になりましたか。「ボリス・ゴドノフ」の「ああ息苦しい」、「売られた花嫁」の「あの人がそんな」のうたのあたりは、「景清」や「求塚」のようでした。放送では、「清経」（猶義）「黒塚」「一角仙人」（実、いづれもNH

〈和泉会狂言会〉

十一月二十日（土）　午後二時

素囃子　神舞　寛鉱一　鬼頭八郎
田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
鉢叩　和泉保之　井上松次郎　他
見物左衛門　三宅藤九郎
鏡男　佐藤卯三郎　井上礼之助
佐藤秀雄
三人片輪　三宅藤九郎
（三曲）和泉保之　野村又三郎
三宅右近

K。本は「三熊野詣」「目」（三島由紀夫、前者は装訂）。

十月は「通小町」（巌）「三輪」（信高）「道成寺」（喜之）と橋岡追善能がある。

神仏混淆と謡曲

西村弘敬

本誌第八二号（九月号）に謡曲と宗教という一文を出した処、印刷校正の不手際にて誤字が多分にありましたので、その正誤旁々今少しく神仏混淆（しんぶつこんこう）について補足して御目にかけたいと思います。

本地垂迹説（ほんちすいじやくせつ）は仏教が我が国に渡来した初めの頃、我が国民には昔からの惟神（かんながら）の神道が奉ぜられて居て、新らしい仏教などには見向きもせぬので、なんとか人の心をつかむ方便として考えられ、茲に仏菩薩は本来の仏ですなわち本地であつて、神様はその替への形をあらわしたもので跡を垂れたもの、という様に説いて、本地垂迹説が出来たのである。

謡曲の檀風（だんぷう）の後シテ出の早笛の後に「抑我朝に。霊神跡を垂れ給い」と謡つてある。その外にも斯様の事は所々にある。彼の養老の謡にも「神といい。仏といい。唯是水波の隔てにて。衆生済度の方便の声」とある如く、仏と神とは水と波との関係の如くに、水を離れて波はなく、仏は水で波は神だという様に説かれてある。此の本地垂迹の説が行はれて明治にいたる迄久しく神仏混淆のままに過してきたのだが、明治の初年に廃仏毀釈（はいぶつきしやく）が行はれ、今迄下積にせられていた神官が俄かに威張り出し、反対に寺院は廃毀せられるのを恐れて、俄かに本堂の前に鳥居を建てるやら、本尊に御神酒を供えるなど大あわてをして、不動尊は「うごかずのみこと」と唱へ替へ、仏では御座らぬ神で御座るなどと滑稽きわまる争いを引起すなど大変なさわぎで、熱田神宮なども坊主の参詣は相ならぬとて、門前で紙製の「ちよんまげ」を坊主頭の上にはつて参詣したなど、ずいぶん滑稽きわまる事もあつた由である。

謡や能の方では出来て以来全然改作して居らぬので、神仏混淆のままであるから、今時の若い人々には誠に変に思われる事と察せられるが、以上の様な実情であるので左様御理解を願い度いと思う。

十一月の予告

十一月三日　能楽殿十周年記念能　十時半始

能　高砂　金剛巌　高安　滋郎
間　井上礼之助

碧　蟬丸　武田太加志　観世元正　宝生弥一
間　佐藤卯三郎

狂　素袍落　和泉保之　野村又三郎　井上松次郎

能　小袖曽我　観世喜之　梅若六郎
間　井上祐一

能　葵上　宝生英雄　宝生弥一
間　和泉保之

狂言　釣針　井上松次郎　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　他

十一月七日　九阜会

能　乱　吉田妙　高安滋郎

十一月十三日　霞会　十一時始

能　清経　梅若盛義　観世鉄之丞　西村欽也
能　定家　和泉保之　西村弘敬
間　梅若猶義　高安滋郎
能　山姥　河村丘造
間

狂　石神　佐藤卯三郎　河村丘造　井上松次郎

十一月十四日　竜神会　岡崎随念寺　九時始

能　班女　近田静子　西村欽也
間　佐藤秀雄

狂　附子　井上祐一　佐藤友彦　井上礼之助

十一月二十日　和泉会狂言会

十一月二十一日　観世会

能　雨月　山本博之
間　井上礼之助

能　源氏供養　梅若六郎
間　井上松次郎

能　項羽　観世寿夫
間　佐藤秀雄

狂　栗焼　佐藤卯三郎　井上祐一

十一月二十三日　能楽殿十周年記念能

能　竹生嶋　岡田頼允
間　井上祐一

能　紅葉狩　植村真太郎
間　井上礼之助　佐藤友彦

狂　雁大名　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　河村丘造

十一月二十八日　青陽会

能　放下僧　観世元昭
間　柴田収武　佐藤卯三郎

能　班女　久田秀雄
間　佐藤秀雄

能　邯鄲　佐藤太俊
間　井上祐一

狂　萩大名　井上松、井上礼之助　佐藤友彦

花甚

商標登録　花甚　株式会社

直売店　駅前豊田ビル一階　TEL(551)4587
名古屋駅表玄関　TEL(551)9078

温室　千種区猪高町西一社　TEL(701)0025

東新町電停東　CBC放送局西隣
TEL(241)0487・529

昭和40年11月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上眼兵衛方　電(321) 1430
名古屋狂言共同社
印刷所
有限会社 安井印刷所　電(541) 4881

狂言人語

晩秋　澄み渡る秋空の下、十周年を迎えた名古屋能楽殿が素晴しい記念能を開くのを皮切りに十一月の演能は別記の通り陸続と開演されます。第五回を迎える和泉会も市民芸術祭参加番組として華々しく挙行されます。絶好の番組は定めて皆様の御満足を頂けるものと確信しております。

尚、十一月三日能楽殿楽屋にて観世流職分太田重次郎氏が急逝されました。慎んで御冥福をお祈り致します。

十一月の催能

十一月三日　能楽殿十周年記念能

能　高砂　金剛巌　高安　滋郎
間　井上礼之助
能　蟬丸　武田太加志　観世元正　宝生　弥一
間　佐藤卯三郎
狂　素袍落　和泉　保之　野村又三郎　井上松次郎
能　小袖曽我　観世喜之　梅若六郎
間　井上　祐一
能　葵上　宝生　英雄　宝生　弥一
間　和泉　保之
狂言　釣針　井上松次郎　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　他

十一月七日　九皐会

能　乱　吉田　妙　高安　滋郎

十一月十三日　霞会

能　清経　梅若　盛義　西村　欽也
能　定家　観世鉄之丞　西村　弘敬
間　和泉　保之
能　山姥　梅若　猶義　高安　滋郎
間　井上松次郎

十一月十四日　梅猶会

狂　石神　佐藤卯三郎　河村丘造　井上松次郎

十一月十四日　竜神会　岡崎随念寺　九時始

能　班女　近田　静子　西村　欽也
間　佐藤　秀雄
狂　附子　大野　弘之　佐藤　友彦　井上礼之助

十一月二十日　和泉会狂言会　午後二時始

狂　鉢叩　和泉保之　井上松次郎　他
狂　見物左衛門　三宅藤九郎
狂　鏡男　佐藤卯三郎　井上礼之助　佐藤秀雄
狂　三人片輪　三宅藤九郎　三宅右近　和泉保之　野村又三郎

十一月二十一日　観世会

能　雨月　山本　博之　高安　滋郎
間　井上松次郎
能　源氏供養　梅若六郎　西村　弘敬
能　項羽　観世寿夫　西村　欽也
間　佐藤秀雄
狂　栗焼　佐藤卯三郎　井上松次郎

十一月二十三日　能楽殿十周年記念能

能　竹生嶋　岡田　頼充　西村　欽也
間　井上
能　紅葉狩　植村真太郎　高安　滋郎
間　井上礼之助　佐藤　友彦
狂　雁大名　佐藤卯三郎　河村丘造　佐藤秀雄

十一月二十八日　青陽会

能　放下僧　観世元昭　柴田収武　高安　滋郎
間　佐藤卯三郎
能　班女　久田　秀雄　西村　弘敬
間　佐藤　秀雄
能　邯鄲　佐藤　太俊　西村　欽也
間　井上　祐一
狂　萩大名　井上松次郎　井上礼之助　佐藤　友彦

狂言解説

石神＝去ろうとする女房を仲人と語らい何とかひきとめようとして……

栗焼＝主命で栗を焼いた太郎冠者、あまりうまそうなので、つい……。

雁大名＝代物を払わず雁を手に入れんとする大名と冠者、さてその手段は。

萩大名＝萩見物の田舎大名、冠者に教えられつゝ作法通り歌を詠もうとするのですが……。

狂言空見

野村広二

熱田神宮能楽殿の演能がはじまってこの十一月で、満十年を迎える。おもいおこせば、戦後は、栄小学校講堂（中野町）、市一高女講堂、名商工会議所、それから松阪屋ホールと、仮設舞台の演能がつづき、そのあいだの営々苦心の計画が実って、三十年に、いまのところへ能楽堂ができた次第です。この舞台に登場してもらえなかった現代の名人上手もいましたが、あれから十年たつと、地元でも、演者の顔ぶれがかわり、そのときの紅顔の少年も、今はりっぱに舞台をつとめることになったし、片や、見物席も、愛好者がかわっていることは、いうまでもありません。春夏秋冬、日曜日ごとに、神宮の青陽にてりはえる若葉と、くろい木立のうえにかかる月に、胸ふくらませ、また口をとがらせた能楽堂通いも、もう十年になりました。一部の現代人には「心のふるさと」といえましょう。三日と二十三日におこなわれる記念能の盛会と、名古屋能楽会の隆盛を祈ってやみません。

十月も、下旬に、京都の「ツタンカーメン展」へでかける。護符のひとつに小さな犬がある。ながめているうちに、この狐によく似た犬のカタチが、あの「釣狐」の主人公である老狐の後日のすがたにおもえてならなかった。東寺の宝物展では、まっさきに、空海筆「風信帖」を目にすることになるが火天像をみることが、祖母に、「目がこわい。なぜあんなにおこってはるの」と無邪気にきくのが、能の鬼畜物でも、小さい者には、やはり、そうだろうとおもったりした。本では「外国公演能」（一〇・二二週刊朝日）、「能・狂言の女」（朝日大阪版、紅と紺と―日本女性史、林屋辰三郎）、「日本文化史叢―世阿弥の生年」（英文・上智大学演劇研究室気付、世阿弥研究会）。名古屋和泉会。十一月二十日。好番組に期待したい。

お報せ

過日、熱田能楽殿十周年記念能が催されましたがその祝賀パーティー席上で宝生九郎氏、喜多実氏より祝辞をいたゞきましたので披露させていたゞきます。

祝辞

熱田能楽殿が創建以来十周年を迎え、本日、文化の日をトし記念能を開催致しますことは御同慶の至りに存じます。

この十年間の関係者の御苦心に対して深く敬意を表します　この能楽殿が、中京能楽会の隆盛に貢献した役割の絶大なことは贅言を要しません。今後ともこの能楽殿を中心に益々発展興隆することを祈ってやみません。この佳日に重ねて田鍋惣太郎氏が輝く叙勲の栄誉をうけられましたことはひとり中京能楽界のみならず、全能楽会の名誉と存じます。

こゝに簡単ながら御喜び申上げます。

昭和四十年十一月三日

社団法人　日本能楽会々長　宝生九郎

社団法人　能楽協会理事長　喜多実

非身非仏

西村弘敬

放下僧という能は昔の仇討（あだうち）劇の一種で、其の中に出てくる放下いうのは、昔の大道芸人であったらしく、今でも東三河の山奥地方に放下というのがある由だが、是は昔のものと同じであるかどうかは判らない。

放下僧の謡の中には禅問答がとり入れてある様で「扨座禅の公案何と心得候べき。入っては幽玄の底に徹し。出でては三昧の門に遊ぶ。自身自仏は扨いかに」とある、此自身自仏が或る流儀の謡では「非身非仏」となって居る、自身自仏と非身非仏とは全然違う事の様に聞こえる、禅の専門家の解釈ではどうなるか知らないが、私共の素人考えでの解釈では自身自仏は「みづからの身はおのづから仏なり、言い替えれば「即身即仏」で彼の「草木国土悉皆成仏」の意に叶う事になるし、又「非身非仏」も「身にあらざるものは仏にあらず」と是れ又前記の「草木国土悉皆成仏」の意と同じ事となり、必竟「自身自仏」も「非身非仏」も究極は同じ事の様に思われる。そこで無門関という禅書について調べて見たれば、其第三十則に馬祖道一禅師に、大梅和尚が「仏とはいかなるものか」と問いを出したれば、馬祖禅師は「即身即仏」と答えられた、又三十三則にも馬祖禅師に他の或る僧が同じ問を発したるに、今度は「非身非仏と答えられた。同じ人に同じ事を尋ねたるに、違った答をしたと出て居り。禅の究極の目的からは同じ事になる様に書かれてあるので、之れは結局どちらも同じ事と見て、なさそうに思える。

十二月の予告

十二月四日　やるまい会　午後五時半始

釣狐　野村又三郎　井上礼之助
萩大名　野村　万作　野村万之丞　佐藤卯三郎
二人袴　野村　悟郎　井上松次郎　野村万之丞　野村　万作

十二月五日　正午始

能　梅若追善能
二人静　梅若景英　梅若泰久　西村　欽也
能　砧　梅若　六郎　高安　滋郎
間　野村　悟郎
能　安達原　梅若　六郎　高安　滋郎
間　井上松次郎　井上礼之助
狂　布施無経　野村又三郎

十二月十一日

能　杜若　熊沢恵美子　西村　欽也
能　菊慈童　梅若　猶義　高安　滋郎
狂　福之神　佐藤卯三郎　佐藤　秀雄　佐藤　友彦

十二月十二日

能　龍田　宝生宝式能　倉本　雅　西村　欽也
間　佐藤　秀雄
能　高野物狂　野口　録久　高安　滋郎
間　井上礼之助
狂　文山賊　井上松次郎　佐藤卯三郎

十二月十九日　乱能

協会よりのお知らせ

高木俊行氏　囃子披　竹内社中
増谷紀子氏　囃子披　竹内社中
山田きぬ氏　囃子披　山田社中
大津米子氏　囃子披　山田社中
植村　稔氏　能天鼓披　柴田社中

付記

なお十二月号は例年通り休刊させていたゞきます